

消失



必然

4月のある晴れた日、東京の隅田川沿いの桜も見頃を迎え、日中には沢山の屋形船が行き交っていた。

その日は、不快な目覚めと共に始まった。枕はベッドから落ち。自分の頭までが落ちかかっていた。

「ああ、もう。もう少し寝かせてくれ」

一人。枕に八つ当たりしてみたが、空しいだけだった。まあ、せっかくの早起き。無駄にする事もない。

頭を切り替え、ベッドから起き出し窓を全開にした。

桜が見頃といっても、まだまだ早朝の東京は肌寒く感じられた。

そう言えば、どんな天候であれ窓を全開にする癖は、元カノがやっていた事だと思いだす。

いつの間にか、僕の習慣となっていることに笑いが込み上げてくる。

天気も上々。チャンスとばかりに、洗濯を済ませ、一気にベランダに干してみた。

「うん、気持ちいい」

一人納得したところで、仕事に取り掛かる事にした。

僕の仕事は、ある雑誌の記者。肩書きに、フリーとはつくのだけれど。性分に合っているので、それでいいと思っている。

今回の依頼は、前日の先輩からの電話によるものだった。

机に置いてあった携帯のコール音。依頼でありますようにと祈りつつ携帯をつかむ。

「はい、牧村です」

(おう俺だ。陽輔、暇か?)

笠井先輩だ。

僕にとっての笠井伸治は、師匠であり恩人でもある。何も考えずに東京に出て来て、自堕落な生活をおくっていた頃。

某雑誌編集部の笠井と出会った。

第一印象は最悪で、何と居酒屋での取っ組み合いからはじまり、外での大乱闘で終わった。

お互い力を出し切った後で笠井が尋ねる。

「兄ちゃん、何やっている人」

僕は、何も答えられなかった。言葉にできる答えもその時はなかった。

(ネットカフェ難民) そう世間で騒がれ始めていた頃。

答えない僕を見て、笠井はどう理解したのか、おもむろに名刺を取り出し、なかば強引に僕に手渡した。

「兄ちゃん。暇なら、明日から俺の仕事手伝えや。楽しいぞ」

耳を疑うその言葉にうろたえていると、僕の肩をポンと叩くと、ニコッと笑って立ち去って行

った。

名刺を見ると、某雑誌の編集長（笠井伸治）とあった。

「変なおっさん。いつの時代の人だよ」

嘘か本当か確信はもてなかったが、騙されたつもりで、次の日訪ねてみる事にした。一種の賭けだったかもしれない。

そして、フリーライター牧村陽輔として今を生きている。

「先輩。いきなり暇かって」

確かに暇なのだが、それは口にする事なく。

「仕事ですか？」

（おう。取材、2、3頼むわ。牧村お前、生まれ東北だよな。うちで今度な、特集やんだよ。その取材。頼めないかな）

ぶっきらぼうに話す笠井は、編集マンとしては些か考えてしまうのだが。僕としてはこんなところが、笠井の良い一面だと思っていたりする。

「はい。いいですけど、内用と予定は」

（嗚呼、それなら何時ものようにメールしといたから、確認してオッケーなら折り返してくれ）

折り返しとは、電話くれと言う事だ。

「はい。了解です。では、また後で」

軽く応えて電話を切った。

正直ホッとした。先月かなりの買い物をしてしまったので、今月は何としても稼がないといけな。あらためて、机に向かいパソコンを起動した後、メールを開いた。

何通か届いた中から（笠井伸治）を確認。クリック。

中身を見ると、何時ものように依頼料、取材内用、取材場所、等々。事細かに記載してある。

「ふうん。遠野物語の特集か」

その中に、人物について書かれた項目があった。それによると、仙台市占い館（楓）

岩手の方言の通訳として同行。3日現着十四時とある。注意書きには本人に電話確認の事。番号と住所も記載されていた。（通訳って）そんなに方言キツイのか、などと思いながら続きを見ると。なお、語り部についてはスケジュール表参照。

「ん、スケジュール表？アポないって事ね」

通訳同行。突撃取材。溜息が洩れる。

先輩・・・ギャラ上げて。

確認が済んでから笠井に電話した。

「あっ先輩、牧村です。メール見ました。オッケーです。でも、何ですかあれ。通訳に、アポなしって」

交渉権を握りたくて、ふて腐れた態度を取ってみる。

（嗚呼、それ。すまん、同行は彼女のたつての申し出。俺の知り合いの娘で、遠野物語のファン。しかも、岩手の方言にも詳しいみたいで。だから、上手くやってくれ。それと、語り部の方は、こっちからなかなか捕まえられなくてさ。だから、語り部のスケジュール表。な、訳だか

らよろしく！)

軽くあしらわれた気がする。ギャラ交渉をすべきか迷う。

「わかりました。それじゃあ、明後日に東北に取材行ってきますね。早くて3日あれば終わると思いますから」

僕の話しを言い終える前に。

(その事なんだが、1週間やる！久しぶりの故郷だろ。少しのんびりしてこい)

「えっ、いいんですか」

(ああ、それと、かかった費用はこっちで持つから)

思わず、YES！ギャラ交渉しなくてよかった。そんな先輩が好きです。

「ありがとうございます。牧村、張り切って取材行って来ます」

(おう。頼んだぞ)

こうして僕は、東北へ取材旅行をする事になった。3日の昼前に上野に付き、チケットを購入する。

「東北新幹線って全車輻禁煙なんですよね」

売場のお姉さんにささやかな文句を言うも虚しく。チケットを手に改札を抜け、上野発11時34分、仙台着13時08分の（はやて）に乗り込んだ。車内は、思っていたほど人は少なく。

「昼寝にはもってこいかも！1時間は寝られるな。待ち合わせにも十分」

煙草が吸えない分寝るしかないと思った。座席を倒し、眼を閉じる。

しばらく、うとうとしているうちに僕は眠りに落ちた。

10数年ぶりに故郷に帰る嬉しさからか、懐かしい光景が見えてきた。懐かしくも悲しくもある田舎の風景。一人の子供が居る。あれは、幼い頃の僕。そう、あの頃の僕がそこに居る。

幼少の頃の僕は、東北のある田舎町で育った。

その田舎町は南北に小さな里山があり、里山と里山の間を細い道が蛇行するように走っていた。その道を挟んだ北の里山のふもとにいくつかの集落がある。そのうちの一軒、一番道に近い南側の家が僕の家。

その家というのが、当時としては珍しく、かやぶき屋根の古い家で、南から玄関を入るとそこは土間。

土間の東側に台所。もちろん（かまど）である。かまどの上の柱には、何やら妖しげなモノが・・・カマ神様である。

説明：土製や木製の面をカマ神とする、かまどの神の風習。火は古来より信仰の対象となっており、人々は火を扱う竈（かまど）を大切にしており、炉や竈の近くに神棚を設けて祭っていたそうです。

かまどを使って炊事をした事はないが、火を熾すという事は大変である。薪割からはじめなくてはならないのだから。

そして、その奥には、五右衛門風呂。

説明：五右衛門風呂は、鑄鉄製の風呂釜で出来ていて。周りはずべて鉄、直火。ようするに熱いのだ。そこで、木製の底板（すのこみたいな）を湯船に浮かばせて、そっと、その上に足を乗っけて、上手いこと入らないといけない。

僕は祖母とその五右衛門風呂によく入ったのを覚えている。

「陽輔。風呂沸いだから、おれど入っぺ」

（東北弁でおれ＝私）

祖母に言われるまま、裸になり入る。

「陽輔。抱っこすっから大丈夫だあ。んでもな、暴れんなよ」

よく言われた。しかし、三、四歳児ぐらいの子供に落ち着きがあるわけがない。

「あづいっ。ばあちゃん！足、あづい！」

「んだがら言ったべ、暴れんなって」

風呂上りにしつこく怒られた。

こんな感じで、僕は幼少期を田舎で過ごしていた。

しばらくすると、また一つ強烈な出来事がおきた。

家の土間の西側に板の間。とととあがったところが・・・囲炉裏がある居間。

居間の北側に僕の部屋があった。部屋と言っても一人で寝られるはずもないので、祖母がいつも一緒に寝ていてくれた。ある晩、いつものように祖母と寝ていると。

「どすんっ」

居間の方からものすごい音がして、僕と祖母は飛び起きた。

「ばっ、ばあちゃん。なん？」

必死に祖母の寝巻きにつかまり言った。

「ふうん。何だべ」

祖母は、ゆっくりと起き上がり電気を点ける。となりの囲炉裏の横の板の間に、あつてはならないモノがあった。

青緑のその物体は、不気味な光沢を放ちながらうねうねと波打っていた。大きな大蛇である。その大蛇はとぐろを巻き、ゆっくりと鎌首を上げると、こちらを見た。

一見すると笑ったように見える口元から、赤い舌をチロチロ覗かせている。

「あんれ、たまげだごど。青大将だ。陽輔。んだがら言ったべ、夜に口笛ふぐなって、みろっ、青大将来ちまった。夜に口笛ふいだら蛇来るって言ったべ。ほれ、見ろ」

早口に祖母は言った。

説明：ヘビは夜行性で、尚かつ小さな振動音を（生きた餌を食べる為）ネズミなどの小動物と間違え寄って来る習性がある。この為、周囲が暗い夜に口笛の音に寄せられ出現すると昔から言われていた。また別の説では、「蛇＝じゃ」と読み、「邪悪な者＝お化け」つまり「夜に口笛を吹くと蛇が出る」と言うのは、「夜に口笛を吹くと邪（お化け）が出る」と言う説もある。

「んでも、ばあちゃん。おれ、まだ口笛ふげね」

懇願する。

「んだが？」

「んだ！」

お互いにこれで納得する。

東北弁の簡素で魅力的なところだ。

しかし、どうしたものかと僕は思っていた。噛まれたら死ぬのだろうか？そして、飲み込まれて溶かされて、大蛇の栄養になるのだろうか。

祖母は、何も言わず青大将の居る居間へ歩いて行き、肩を左右に揺らしながら、右手でひょい

つと青大将の首をとると、そのまま外に出て行ってしまった。

あっけにとられる僕。

しばらくして、帰って来た祖母がこう告げた。

「なあ、陽輔。蛇つうのはな、家の守り神だがら、殺すてはなんねんだぞ。それど、白い蛇は神様の使いのもんだがら、ぜって殺したり悪さしたりすねごど。祟られっかんな」

「んだがあ」

「んだ！」

説明：蛇の迷信は数多くあるが、東北地方には家に居つく蛇は家の守り神とされ、害になるネズミなどを食べてくれるため、愛されるべき存在だった。

夢か現実か区別がつかないぐらい、鮮明に映し出される光景は、やはり夢なのだろう。

当時の僕には、両親が居た。夢の仕組みはよくわからないが、都合よく両親だけ消えるというのは夢なのだと改めて感じる。他にも都合よく消えているモノがあるかもしれないが、夢だと思えば安心して見ていられる。

しばらくして、だいぶ成長した僕が居る。小学校3、4年頃だろうか・・・夏であろう。Tシャツに短パンサンダル。虫かごを持っていないのが少し残念な気がする。

幼少の頃の僕が、大人である僕を見て屈託のない笑顔で笑う。今の僕にあんな笑顔ができるだろうか・・・

幼い僕は、笑顔のままぐるりと反転し、夕暮れが近づいた田舎道をスタスタと歩いて行った。

「行かなくていいから」

遠くから女性の声がした。

僕にもそう思えた。そっちに行ってはいけない気がした。なぜ？理由は分からないが、行ってほしくない。けど、行かなければならない。そんな矛盾した考えもあった。

そのまま後を追う。どれぐらい歩いたのだろうか、日に陰りが見え始めた時。

幼い僕は、立ち止まる。まるで動かない。何があったのかわからないまま、僕は声をかけようとそばに寄った。その瞬間、目の前が真っ赤に染まる。どう言う事だ。幼い自分を探すも、どこにも見当たらない。手すら触れる事が出来ない。何が起きた。

赤に染まった世界が不鮮明でもどかしかった。

ハッとして目が覚めた。思わず辺りを見回す、窓際に座った隣のおばさんが、こちらを見て、クスクスっと笑っていた。照れ隠しに、僕はおばさんにぺこりとお辞儀をした。腕時計を見ると、13時ちょうどだった。間もなく仙台に到着する。僕は慌てて荷物を纏めると、デッキへと移動した。

占い（1）

仙台駅に到着すると、煙草を吸いたい衝動に駆られ辺りを見廻す。そうしたところで、駅構内は全面禁煙である。喫煙所などあるはずもなく、仕方なく出口と書かれたエスカレータに乗り込み改札を目指す。

改札を出て左に向かうと、カフェらしきものが見えたので、すかさず入店すると店員を捕まえ尋ねる。

「ここ。煙草吸える」

「はい、大丈夫ですよ」

店員が笑顔で答えてくれた。よかった。

煙草を一本だけでも吸ってから行こうと思い、コーヒーを注文しがてら、店員のお姉さんにこれから行く占い館の事を尋ねてみた。

店員によれば歩いて十分もかからないで行けるそうなので、コーヒーと煙草をゆっくりと堪能できそうだ。

煙草を取り出し、火を点け、一気に肺に煙を流し込む。クラっときそうな感覚がたまらない。完全な依存症だなと思えてくる。

コーヒーを持ってきてくれた店員が、メモを僕に手渡してくれた。見ると、先ほど尋ねた占い館までの簡素な地図である。地元の人のお勧めがあらためて身にしみる。

僕はその店員にお礼を言ってから、コーヒーを口にする。ほろ苦い味を口の中で味わううちに、車窓の中で見た夢を思い出す。

あれは懐かしい田舎の思い出。しかし、最後に見たものは一体何だったのか、僕の記憶にはない無関係な幻想だったのか。

いくら考えても思い出す事が出来ないまま、カフェを後にした。

カフェを出て、二階に降りると仙台独特のレンガ色のスロープが見える。西側出口から表に出ると、仙台市の町並みが飛び込んでくる。僕は地図を片手に、あの頃とはだいぶ変わった仙台の町並みを、目にしっかりと焼き付ける。

昔の記憶が、少しずつよみがえる。派手なスタジアムジャンパーを買ったあの店は、見る影もなく消えていた。

僕は地図を確認しながら、そのビル。今では横文字が並ぶ〇〇だが、そこを目指してスロープを歩きだした。

地図によれば、そのビルを目指して階段を降り横道を西にと書いてある。

住所というのは人にとって曖昧なものである。僕だけかもしれないが。

勝手知ったる、とはよく言ったもので、昔僕はここを歩いていた。景色は変わったとしても、

道はいつもそこにある。突き当りを右に見れば〇〇横商店街。その一画に目的の占い館の看板が見える。二階に昇る階段は、一人一人が通れば良いかなぐらいの幅しかなかった。

昇り終えた先に見えてきたのは、敗戦後の闇市かと思わせるほどに雑多な品々が陳列されていた。僕は、目的である占いの館を目指して奥へ奥へと進んでいき、やっとのことで目的地、占い館「楓」を見つけた。

テレビのセットかと思わせるような、原色のネオン管で楓とある。ドアはなく、カーテンで仕切られていた。

僕は、覗き込むようにカーテンを開けた。中は、深海を想わせる程の、ブルーで統一されていた。

六畳程のスペース中央にテーブル、対面したところに椅子が二脚ある。

「すみません。昨日電話した者なのですが、楓さん。いらっしゃいますか」

様子を伺いながら、尋ねる。

「はい。ちょっと待っていただけます」

奥から、女性の声がした。ここは別に部屋があるようだ。しばらく待っていると、二十代前半の女性が現れた。

彼女を見た瞬間。引いた。メイド服で登場した彼女は、僕を見てニコッと微笑んだ。

「あの、楓さんはいらっしゃいます」

彼女が、楓本人ではありませんようにと願いながら尋ねる。

「はい。楓は私です」

言い切った。残念な結果になるも、気を取り直すことにした。

「あっ、そうですか、僕は牧村と申します」

即座に名刺を彼女に手渡す。

「昨日電話で申しました・・・」

彼女は、（しっ）という仕草をする。

「とりあえず、お座りになって下さい」

椅子の方に手招きしてくれた。

「ありがとうございます」

礼を言ってから椅子に座る。

「何かお飲みになります」

彼女は椅子に座り掛けながら聞いてきた。

「お構いなく」

先程カフェで、コーヒーを飲んだばかりだったが、初対面で断るのも失礼かと思った。

「コーヒーでも煎れてきますね」

彼女は、（畏まりました。御主人様）と言わんばかりに立ち上がると奥へと消えた。

僕は、次に何を話すべきか考えた。見知らぬ人間といきなり取材旅行など、初めての経験である。彼女がどう思っているか知らないが、とりあえず、打ち解けないと。

彼女が二人分のコーヒーを運んで来てくれる。

「どうぞ」

「ありがとう」

「あの、楓さんはこちらで占いをしているのですよね」

落ち着いたところで当たり障りのない事から話し始める。

「はい、もう5年になります」

屈託なく、応えてくれた。

「牧村さんは、どうなのですか、ライターのお仕事」

名刺をちょっと横目に見て、彼女が言った。

「えっ、僕。えっと、もう少しで十年になります」

「そうですか、十年。長いですね」

「はあ、これしか出来ないもので・・・ところで、その肩のモノは」

先程から気になっている事を思い切って質問してみた。

「えっ、肩？」

右肩をすっと見るなり。

「嗚呼、こちらは黒猫の千里さんです。この方も、こちらで5年になります」

執事でも紹介するかのようには彼女は言った。

「千里さん？」

飼い猫を（さん）って、痛い人なのか、触れてはいけなかったのか。何とか軌道修正して別の話題に持っていこう。

「そっ、そうですか。可愛らしい猫さんですね。それでは、楓さんはどのような占いをなされるのですか」

強引かも、と思った。

「はい、主に人相占いですね。まず、お電話でご予約いただきます。その後、ご来店いただきましたらば、こちらに本名以外の、お名前を自筆でご記入いただきます。どのようなお名前でも結構ですよ。例え偽名でも」

彼女はテーブルの上で1枚の紙を見せてくれた。A4用紙に書かれた文字は見た感じ、梵字のようである。その用紙の一番下に署名欄。そこに、何でも構わないから署名しろ。そう言う事らしい。

「それで」

思わず僕は口にしていた。

それを聞いた彼女は、ちょっと怪しげな笑いを浮かべてから、（とんとん）っと、用紙の署名欄を人差し指で弾いた。

「百聞は・・・」

クルっとした眼を僕に向ける。

「書け・・・と？」

彼女に尋ねてみるも、何も言わずにニッコリ微笑まれた。彼女のペースに乗っかる形で、その用紙を手にする。少し考えて、偽名で良いと言った事を思い出し、名刺にも使っているペンネーム（牧村大輔）を署名欄に記入した。それを手渡すと、用紙を見ながら（ふむふむ）と満足げな

顔をしながら頷いた。

どんな、答えが返ってくるのか期待した。

「牧村陽輔さん。1982年4月3生まれ、今日が誕生日ですね。おめでとうございます」

僕の顔と用紙を見比べ、笑顔で答えた。

占い（2）

僕は、言葉が出てこなかった。当たっているのだ。頭の中で考えを巡らす。昨日の電話。今日の、彼女との会話。その中で本名を名乗ったつもりもなければ、生年月日を告げたつもりもない。

「どうして」

素直な感想だった。

「はい、正解。普通の人はずと書いていいほど、その言葉を言います。そこで、私がこう言います。本名以外のあなたの名前を書いて下さいと言いました。しかし、そう言って署名していただくと、書かれた文字には想いが映り込むのです。それを私は見る事が出来るのです。とっ」

満足げに言った彼女が、舞台女優に見えてきたのは僕の気のせいだろうか。どういった仕組みにせよ、本名と生年月日を当てられたのは、さすがに驚いた。

「まあ、これが占いの（つかみ）です。私は（マリア）ですから、これぐらいはどうって事ありません」

「えっ、つかみ。マリア」

聖母？

「あっ、気にしないで下さい。それより、牧村さん」

身を乗り出し、真剣な眼差しを向け。

「お伝えしなければいけない事があります。

大変言いにくいのですが。よろしいですか」

「はい、何でしょう」

圧倒されるまま、次の言葉を待ってみる。

「牧村さん。貴方、このままでは死にます」

初対面の人間に向かって死ぬって、占いならもう少しましな事を言ってほしいものだ。

彼女の肩に乗かって居る、黒猫の千里と眼が合った。二十の不吉に感じられた。

「そんな、死ぬってどう言う事ですか」

「そうですね。牧村さん、以前大事なモノを失くされた事はありませんか。その、失くされたモノが関係していると思うのですが」

「失くしたものの、ですか」

過去に失くしたものなど、山ほどあってわからん。と言いたいのをぐっと堪えて。曖昧に答えた。

「はい、私にもまだよく解らないのですが、牧村さん、死相が出ているのですよ」

不吉な事をまだ言うか。縁起でもない話は、この辺で終わりにしよう。そろそろ、本題に入らないといつまでたっても話が進まない。

「えっと、ご心配下さって、大変有難いのですが、大丈夫だと思いますよ。それに今回の取材に

は占い師である、楓さんも一緒ですしね。まさか、遠野物語の取材だからって、妖怪に食われるわけでもないですし」

妖怪まで引っ張り出して、話を終わらせるのはどうかと思うが、この際仕方がない。

「はあ、そうですか。でも、気をつけて下さいね。私の占いは、ハズレがないので」

そりゃあ、占い師が自分は当たらないとは、口が裂けても言わないだろうね。

「それじゃあ、今回のスケジュールなのですが、編集長の好意により、多少の余裕があります。実のところ、ここ宮城は、僕の故郷なのです」

「えっ、そうなのですか。地元の人だったのですね」

これは、占い師の彼女も、予想していなかったのか、かなり驚いていた。

「はい、ですから今日は、こちらで一泊してから、明日レンタカーを借りて郷里を散策したいと思っています。その後、岩手に乗り込みます。ですので、取材は明後日からになります。了解下さいますか」

彼女は素直に了解してくれた。

その後、色々話していくうちに、彼女がなぜ今回の取材に同行する事になったのか、聞かせてくれた。母方の亡くなった祖母が、岩手で語り部をしていた事。その関係で、遠野物語に興味を持ち、岩手の方言にも詳しくなった事。今回の取材旅行の事を笠井から聞いて、是非同行させて欲しいと頼み込んだ事など。

一旦別行動を取る事になった僕に。

「お守りに」

そう言って、蛇をモチーフにしたシルバークレスレットを手渡してくれた。

中々洒落た造りのクレスレットを、一目で気に入ってしまった僕は、有難く受け取り、お礼を言ってから、占い館を後にした。

次の日、早速レンタカーを手配した僕は、生まれ故郷であるT市を目指した。

昔はまだ市ではなかった。町村合併を繰り返し、いつの間にか市になっていた。その事に驚いたものだった。そのT市は、仙台から1時間あまりの道程で到着した。その町並みを見ると、代わり映えのない風景に、これの何処が市なのかと半ば呆れた。

以前より廃れたようにも見え、切なさでいっぱいになる。

程なく、生まれ育った家まで数キロという所で、僕は車を路肩に止め、車外へ出て大きく伸びをした。4月だというのに、東京とは大分気温の差があるのか、身震いするほどの寒さを実感した。

辺りを見回すと、あの頃走り回っていた景色が広がる。里山を削って碎石場となっていた場所は、今では多目的センターになっていた。

その一画には、最近立てられたのか市長選のポスターがある。

誰がこのセンターを建てさせたかは知らないが、無駄な事をするものだ。税金を投じて作った方がいいが、利用されているとは到底見えなかったからだ。

しばらく眺めていると、先の道から老女が歩いて来るのが見えた。この辺特有の割烹着姿の老女は、僕の横を通り過ぎる時軽く会釈した。つられて会釈を返す。

そろそろ行くか、そう考えた時。後ろから声をかけられる。先程の老女だ。

「まずがっでたら、申す訳ねんだげっともなあ。もすかすて、ようちゃんねえが」

老女がようちゃん呼ばわりされる記憶はないのだが。

「はい、そうですけど、あなたは」

「何だべ、何だべ。やっぱり、んだべ。ようちゃんだべ、大っきぐなって。おれだ、富子だ」

はしゃぐように、老女が名前を告げる。

しばらく考えて、小さい頃よく世話になっていた遠い親戚の叔母と気付いた。

「富子ばちゃん。うわっ、懐かしいな。そう陽輔だあ」

懐かしさのあまり、昔の呼び名を口にする。

「んだべ、やっぱ陽ちゃんだ。何すた。何年ぶりだ。こごで、何すてんだ」

思いついた言葉を、全て口にした感じだが、なんとなく理解出来たので。

「うん、仕事でこっちに来ただけど。少し時間があつたから田舎にちょっと寄って見ようと思ってね。ここには、18年ぶりかな」

本当に懐かしい人に出会えた。

「んだが。あれがら18年ぬもなつか、んで母ちゃんだずは」

「うん、あれから色々あつてね。今は、一人暮らしだよ」

両親の事を聞かれるのは解っていたが、あまり話したくなかったので、素っ気なく答えた。

「んだな。色々あったんだべな、あんどぎだってなあ、陽ちゃんだずもあんなひでごと、あったべすな。母ちゃんだずも大変だったべがらな」

「えっ、何」

考え深げに話す叔母。その言葉の一部が気になり聞き返す。

「いや、いや、何でもねえ。それよっか、陽ちゃん。ゆっくりしてげんだったらば、おらいさあばいんちゃ。お茶っこだすから」

くしゃくしゃの笑顔で手招きされた。

「うん、ありがとう。富子ばちゃん家、遊びに行きたいとこだけど、これから、仕事で岩手まで行かないといけないし、もう少し見たい所もあるから、また今度にでもお邪魔するよ」

そう告げると、叔母は悲しそうな表情になる。

「んだら、おごご持ってげ。今、切ったの持ってくっから」

「あっ、いいよ。富子ばちゃん」

僕の言葉も聞かずに、ここぞとばかりに機敏な動きで家へと向う叔母を見て、まだまだ長生きしそうだと思えた。

しばらくして、戻って来た叔母が手にしていたのは、買い物袋。その中にはタッパー詰めされた胡瓜の漬物が入っていた。

「ありがとう」

「んん、陽ちゃん、ちゃっけ頃、お菓すよりおごご好きだったがら。おしょすいがも知んねけど、泊まっごででも、食ってけろ」

「そんな事ないよ。有り難く頂くよ。そうだ、富子ばちゃんさ、東京の台東区って知っている」

「んん、知やねなあ」

「なら、浅草は」

「そいずならわがる。でっけえ提灯あつとごだべ」

「そうそう、その近くに住んでいるから、もし、東京に来る機会があれば、連絡して。浅草でも案内するから」

「んだがぁ、ありがどないん。そんどぎは、頼むがな」

叔母に、名刺を手渡すと、名残を惜しみながら別れを告げる。

叔母と別れた後、数キロ先の路肩に再び車を止めると。今度は、知り合いに会うのは避けようと、車内から辺りを見回す。

目の前には僕の生家。右隣りにも家はあったが、誰が住んで居たかも定かでない。

あらためて、周辺に人影がないのを確認したうえで、生まれ育った家に目を向ける。

あの頃のかやぶき屋根の家ではなく、今風の家建て替えてはいたが、それでも懐かしさが込み上げてくる。

よく観れば、祖母が大事にしていた南天の木や、僕が植えた桜の木も残っていた。

自分の感情が高ぶるのがわかって、少し恥ずかしく思える。

その時、誰かに見られている気がした。辺りを見ても、誰も居ない。もしかすると、今住んでいる住人が、僕の行動を怪しんで、どこからか見ているのかもしれない。

それはそうだと思えた。僕はここの事を知ってはいるが、相手は全くの他人で僕を知らない。あまり怪しまれるのもどうかと思えたので、静かに車を発進させた。

500メートル程車を走らせると、道が二股になる。

右の道が岩手方面に、左の道に行けば別な集落があるのだが、僕は迷わず左へとハンドルを切った。ほんの少し行った所に小さな橋。その橋のたもとに、柳の木がある。その手前で、車を止め車外へ降りた。

以前、そこには綺麗な小川が流れていた。今では見る影もなく、コンクリートで固められている。その川に沿うように小道があるのだが。柳の木の反対側の小道を、僕は、ゆっくりと歩き出した。下流に行くにしたがってゆるやかな左カーブになっており、しばらく歩いていると、左手に小さくではあるが、僕の家が見える。

その場所から、川を挟んだ向こう側に、僕が幼少期に遊んだ里山がある。

小さい頃は小川だったので、簡単に飛び越えて里山へと入り込めたのだが、今はコンクリートで出来た低水護岸。勢いをつければ飛べるか飛べないか、考えてみる。

「おいっ」

突然の声に驚き、危うく川底に落ちそうになる。見ると40代ぐらいの男がこちらに歩み寄って来る。

「そごで何すてる」

「あっ、えっと、そちら側に渡れるかなあって」

子供の言い訳みたいになった。

「さっきから見れば、怪すいやずだな。そごは、私有地だから勝手に入っていいどごでねえど」

先程から見ていた。もしかして、あの家の住人か？だとしたら、あの視線はコイツか。コイツだとしたら、何となく納得できた。陰湿な目をした男は、4月だというのに、黒い革手袋をしている。ちょっと変わっていると言うのか、見るからにイラッとさせるその男の様子に、我慢ならない気もした。

揉め事は避けたかったが、性格のせいかわざら口をついて出た言葉。

「私有地。お宅様の」

「ん、んでねげども」

「ああ、市とか町の持ち物って事ですね」

口ごもった様子をいい事に、厭味のつもりで男に返す。

「んだけども。よそ者が、勝手に入っていいどごでねえ」

男は声を荒げた。

これ以上話していると、本当に揉めそうだ。

「そうですか、わかりました。失礼します」僕は、車に戻ろうとした。

男は、それを見て満足したのか、僕とは逆方向に歩き去った。

せっかくの思い出が、あの男のせいで台無しだ。イラついたまま、車へ戻って来た。

ふと思い立ち、柳の木の下へ歩みを進める、その時。小さな女の子が見えた。座敷ワラシのような、古い着物姿で日本人形を持っていた。笑っている。気のせいだと思った。その子は、姿が透けて奥の柳が見えていたから。

不思議と驚かなかった。柳の木の根元に座ると、気持ちが安らぐ。あまり怒るなと言う事なのだろうと、勝手に解釈してその場の世界を受け入れた。深呼吸をすると、田舎の空気が体の隅々まで行きわたる。

岩手に、到着して間もなくの事。僕は自分の選択に間違いがなかったと確信していた。

遠野の取材に来て豪華ホテルはイメージに合わない。やはり古い旅館で和室だ。東京を出る前日予約を入れた。

それが今日泊まる（旅館すずや）昭和初期に建築されただけあって風情がある。中に入ると意外にも玄関が広く。館内は古い漆塗りが施してある。照明は抑え気味にしているせいか、情緒溢れる感たっぷり。この旅館にして正解。

食事も、名物ジンギスカン。北海道以外にも、この遠野が有名らしい。50年も前からあると、女将が言っていた。

そして、1番の楽しみが、ひつつみ。夕食時が待ち遠しい。

まず、遠野物語を語るうえで忘れてはならない人物が、民俗学の父、柳田國男。もっと詳しい人ならば、日本のグリムとまで言われた、話者、佐々木喜善を思い浮かべる事だろう。

二人が出会ったきっかけは意外にも怪談。引き合わせたのは、詩人の水野葉舟による。

佐々木が柳田に対し（知己を得）と記載してある事から、よき理解者であったろう事が伺える。

それに反し柳田は、（喜善の語りは訛りがキツク、聞き取るに苦勞した）との事。言葉の壁があったようだ。

さらに、驚いた事がある。民俗学者、柳田國男がキャリア官僚であった事。

話者、佐々木喜善が小説家であった事。

歴史に残る人物とは様々な顔を持ち合わせているようだ。

それから2年の月日を経て、

『遠野物語』が誕生する。

「出だしはこんな感じかな。後は、明日からの取材。写真と記事。っと」

端末を閉じながら独り言をつぶやく。岩手の旅館に到着して、2時間を過ぎようとしていた。

そろそろ、夕食の時間が近付いた頃。中居さんが訪ねて来た。

「お客さん。お客さんのアシスタントだと言って、女性の方がお越しになっていますが」

突然の来訪を告げられる。

「えっ、間違いじゃないですか」

中居さんに言ったところ、困惑されるだけだったので、渋々玄関へ向かった。

そこには、ショートカーディガンにデニムサロペット姿の女性が控えて居た。小首を傾げながら女性が手を挙げる。

「あれ、もう忘れちゃいました。楓ですよ。牧村さん」

前日には、メイド服だった楓だ。着る物と化粧で大分印象が違って見えるのは、女性特有なのだろうが。それにしても寒くないの、楓さん。

「あれ、どうして此処がわかったんです。それに、アシスタントだなんて。普通に占い師の楓さんって言うてくれたらよかったのに」

「へへっ。それが、占い師じゃ怪しまれるかなって思って、ついね」

ちょっと照れる表情が可愛らしい。

「そんな事ないと思うけど。ねえ」

横で愛想笑いしている、中居さんに話をふってみる。

「はい、そうですね」

在り来りな返しだったので、（知り合いですから）と言って追い払う。

「で、どうして此処がわかったの。それに待ち合わせは明日のはずじゃ」

「占い師だから。と言いたいところだけど、笠井の叔父様から聞いたんです。早く来たのは、美味しい物いっぱい食べられるかなって思ったものですから」

色気より食い気派ですか。

「でも、宿の予約とかどうしました」

「うん、それなんですけど。此処が気に入ったのでえ。あつ、女将さんいるかな」

何て、無計画な。楓は先程の中居を再び呼び止め、女将に部屋が空いているか確認させている。空いているとわかった途端、チェックインし、荷物を中居に預けた。

「じゃあ、食事にしましょうか。お腹空いちゃった」

かなり強引な彼女のペースに、やたら巻き込まれがちだ。

「そうですか、食事にしますか。では、楓さん。明日9時、此処で」

やれやれ、やっと開放される。部屋に戻ろうとした時。とことこ楓も付いてくる。部屋が、一緒の方向かと思いつつ。

「あの、楓さんも部屋こっちですか」

「いいえ。私も牧村さんの部屋に行くの。だってね、私の部屋は6畳なんですって、狭い部屋で寂しく食事してもつまらないでしょ。だから、あの中居さんに同じ部屋で食事しますって言ったの」

お前は子供か。男だったら蹴り飛ばすところだけど、先輩の知り合いだし。

「はあ、そうですか、ご自由にどうぞ」

半ば諦め、食事をともにする事にした。

「このジンギスカン、美味しいですね。それに、ひつつみは懐かしい味。これ楽しみにしていたんですよ。何と言っても、婆ちゃんの味ですからね」

食事をするうちに気分が一新された。

「はい、私も牧村さんと同じです。田舎の祖母がよく作ってくれました。それに、このお新香も最高ですね」

二人の想いは違うだろうが、懐かしい田舎の味は共感出来た。

「でも、何で（ひつつみ）なんですか」

本来の楓の役目を思い出し、彼女に通訳を頼んでみる。

「それはですね。引きちぎってと言う意味なんですけど、岩手の方言になるとひつつまんで。それが、ひつつみになったようです」

へえ、ちゃんと役立っている。

「そうですか、流石ですね。うちの方では、ハットですけどね。意味は全く解りません」

一般的にはスイトンだった気がする。

「ところで、明日は何処から取材するんですか」

通訳させた途端に、仕事の話しになってしまった。

「あっ、まず遠野市観光協会からですかね。

是非、手に入れたい物がありまして。それと、取材と言っても普通に観光して、眼で見て、聞いた事をそのまま記事にするだけなんです。畏まれても、困りますしね」

正直なところ、誰にもアポ取っていないし。僕としては、観光とか物語ではなく、妖怪について調べたかったのだが。それは、話さず言葉を続けた。

「それに、観光協会に行けば地図が貰えるんですよ」

「地図。それが手に入れたい物ですか」

肉を口にしながら言う。こんな時執事なら、いけませんお嬢様って言うかな。

「嗚呼、いえ。地図は観光用のなんですけどね、この民話はこの場所を舞台にしています。みたいな。で、手に入れたいのは別です。それは、明日のお楽しみって事で」

勿体振ってみた。でも、彼女なら知っているかもしれない。

「あっ、ケチですね。まあいいです。明日を楽しみにします。でも、地図は便利そう」

少し拗ねた感もあったが、切り替えは早いようだ。

「ええ、3枚ぐらい有るみたいですから、全部戴いちゃいましょう」

「はい、そうしましょう」

妖怪（1）

遠野市観光協会は、遠野駅の西。交番隣に位置している。僕は、朝食を済ませた後。徒歩で、遠野駅を目指した。相変わらずデニムのサロペットだったが。さすがにトップは黒のロングカーディガンに変えていた。

楓は道すがら、あそこに行きたい。あれが食べたいなどと、自己丸出しで制御不能になっていたが。観光協会に着く頃には、なんとか大人しくなっていた。中で一通りのパンフを貰い。案内係の人に、こう告げた。

「カップ捕獲許可証を2人分下さい。写真付とそうでないやつ」

目的は果たされた。

カップ淵に行く車中。楓はおおいに笑い転げていた。カップ捕獲許可証を買った僕が、イメージではないそうだ。どんな、イメージだか知らないが。その後も、許可証の裏を見ては笑い転げた。裏には、カップ捕獲7ヶ条が記載されている。

まず、

1. カップは生け捕りにし、傷をつけないで捕まえること。
2. 頭の皿を傷つけず、皿の中の水をこぼさないで捕まえること。
3. 捕獲場所は、カップ淵に限ること。
4. 捕まえるカップは、真っ赤な顔と大きな口であること。
5. 金具を使った道具でカップを捕まえないこと。
6. 餌は新鮮な野菜を使って捕まえること。
7. 捕まえたときには、観光協会の承認を得ること。

以上。

「そんなに、笑うとこかな。取材の為にもいいと思えたし、金額的にも、リーズナブルだし。なんと言っても、ロマンがあるじゃないですか。それにね、カップを捕まえると1000万だそうですよ」

言い訳染みていると思えたが、実際は、僕が欲しかったのだ。取材に託けて購入した。

「洒落過ぎているにも、程があるじゃないですか。カップ捕獲許可証って。ねえ」

「いやあ、でも、実際に観光客の気持になってですね。体験して、その結果、いい記事が書けるんですから、あまり笑わないで下さい」

言えは言うほど笑いが込み上げてくる。

「ほら、牧村さんだって、自分で言っというて笑っているじゃないですか。ねえ、千里さん」

ん、千里さん。嫌な予感。楓を横目で見ると、そこには、しっかりあの黒猫の千里が居座っていた。思わず、急ブレーキをかける。

車を止めて再度確認しても、居る。

「んな、何ですか、その猫。いつから居たんです。どっから、湧いて出た」

お前は妖怪か。

「ああ、湧くなんて失礼な。千里さんは昨日から居ましたよ」

普通に話す彼女に、ついて行けない。

「昨日からって、どこに居たんです」

「はい、この中にずっと」

鞆を指し示す。

「そんな、食事、トイレはどうしたんです」

「ああ、食事は夜に部屋で、トイレは外で済ませてもらいました。ついでに言うと、寝る時は一緒のお布団です」

一緒のお布団って、旅館はペット禁止だ。

「ばれるといけないので、内緒にして下さいね」

見透かしたかのように、先手を取られる。

「あのね、楓さん」

今更言っても仕方がないが、自己中にも程があるのでは。

「はい」

自分は間違っていない、と言わんばかりの素直な返事。

「はあ、何でもありません。旅館にはばれないようにお願いしますよ」

強く言えない自分に落ち込む。

「大丈夫です。千里さんは大人しいので、絶対ばれません」

シュタッと敬礼のようなマネをした。

この先、大丈夫なのだろうか、心配。

カップ淵は、遠野の駅からだと約20分。駐車場からの徒歩を含めてだが。

土淵町の常堅寺裏を流れる小川は、うっそうとした茂みに覆われ、澄んだ水は、さらさらと流れている。伝説となったカップは、そんな大自然の中で暮らしていたようだ。

小川のほとりには、小さな祠があり、子をあやす格好でカップが鎮座していた。

僕は、周辺の写真を一通り撮り終わると。

「楓さんも、よかったら写真どうですか」

猫の千里と一緒に辺りを散策している楓に告げると、にっこり微笑んだ。

「いいんですか。なら、牧村さんも一緒に撮りましょうよ。せっかくですから」

ならばと、カップを中心に、人二人と猫一匹の居る風景を写真に収めた。

写真を撮り終わってから、二人でカップが居るか居ないか話し込んだ。

「僕は、カップは居ると思いますよ」

「なぜですか」

「他の妖怪と違って、全国各地に、伝説があり過ぎると思うんですよ。だから、それらしき生物は居たのではないかな。それに、僕個人の願望ですかね」

「そうかも知れませんね。私もカップは居てほしいです。それから、座敷わらしも」

相変わらず、猫の千里はふてぶてしい目でこちらを見ている。妖怪猫又？

その後、山口の水車を見てから遠野のふるさと村へと向かった。山口の水車の近くには佐々木

喜善の生家もあるのだが、今も子孫の方々がいらっしゃって、一般公開はされていなかった。ふるさと村で早めの昼食を済ませた後、一度戻る事にした。

観光客の間をすり抜け、車に行こうとした時。客の一人が突然倒れ込んだ。二人で覗き込むと、背中から血を流しているようだ。

「大丈夫ですか。どうしたんです」

男性は、痛みの為か言葉が出ない。

何事が起きたのかわからないまま、周りを見渡す。すると、フードをかぶった人物が逃げていくのが見えた。楓に男性を任せ、僕は後を追う。しかし、追い付く間もなく、止めておいた黒のワゴン車に乗り込まれ、160号線を南下して行くのが見えた。ナンバーだけでもと思い、必死に見たが、泥で隠しているようだ。諦め戻ると、男性の傍らに、彼女なのか蒼白な顔つきで、男性に声をかけていた。状況も飲み込めずにいると、遠くから救急車のサイレンが聞こえてくる。誰かが通報したのだろう。程なくして救急車が到着し、

同時に警察も来て、その場に居た人々に、事情を聴いているようだったが、誰もが詳しい事情を話せる者は居なかったようだ。

僕ら二人も同じ事だった。

警察から解放されたのは、13時半を回ったころだった。僕と楓は、車に乗り込むと急ぎ（とおの昔話村）へと向かう。

何とか14時までに着く事が出来た。入館料を払い終わると、語り部による昔話を聞き始める。語り部は、Sさん。笑いを交えた語り口調で話しに引き込まれる。

しかしながら。

「ムガス、アッタズモナ」の出だしから、話始めるも・・・こんなにも理解できないものかと、岩手の方言の奥深さを実感した。一応レコーダーには収めたものの、楓が居なければ理解不能であった。

今回聞けた昔話は二つで、一つは、（おしらさま）もう一つは、（寒戸の婆）この2話である。残念な事に、（座敷ワラシ）の話は聞く事が出来なかった。

どうやら、時間帯や語り部の事情で毎日の話が変わるらしい。

妖怪（2）

その日のうちに、今日聞いた昔話を通訳してもらおうと、夜のうちに楓を呼んだ。

「昼間のアレって、何だったのだろう」

楓が唐突に言って来たアレとは、昼間ふるさと村で起きた事件の事だろう。

「ああ、そうですね。金銭目的なら、あんなところでやらないだろうし。もしかして、彼女を奪われた元カレがやったとか」

他人事だと、さらっと人の不幸をネタにする。ライターなら、もう少し掘り下げて事件を追う気構えが欲しいところだが、僕は社会ネタが苦手だ。

「ええ、そうかな。でも、怨恨の線ではあるよね。絶対そんな感じがする」

楓も、人の不幸は蜜の味と言わんばかりに目を輝かせていた。やはり、人の子はみなそうなのだろうか。

そろそろ、本題に入ろうかと思い。

「楓さん。申し訳ないんだけど、今日の語り部さんが、話してくれた内容を分かりやすく教えてくれないかな。簡略的でも構わないからさ」

少し口を滑らかにしてもらおうと、仲居さんに頼んでビールを運んでもらっていた。それを、楓に進めながら、丁重にお願いする。

「はい、喜んでお引き受けしますよ。その為に来たのですから。観光ばかりでは、笠井の叔父様に後で何言われるか知れませんから」

納得して頂いたところで、レコーダーを用意して、話を聞き始める。

「まず、おしらせまから行きますね」

「はい、お願いします」

「ある村に、父と娘が居ました。二人は白い馬を飼っていたそうです。娘と馬は・・・」

楓は、ビールも手伝ってか、最後まで難なく話してくれた。

「へえ、成程ね。中々興味深いね。それに、すごく想像力がわいてくる感じだよ」

本当に、そう思えた。

「どう言った、想像です。変な想像はいけませんからね」

変な想像。それもアリなのだが、これは違うと思う。

「純粋な遠野物語のファンである、楓さんに怒られるかも知れないけど。こんな考えは、どうかな。オシラサマである、あの白い馬を落ち武者として、その落ち武者を匿っていた娘が恋におちる。それを知った親が、どんな災いが起きるか知れないと、侍を惨殺する。悲しむ娘が、侍の後を追って自殺する。後から、侍が隠し持っていた、高価な物を元手に蚕を養殖して財をなす。だけど、実際に娘が死んでしまい、居なくなっっては世間的にも困る。そこで、オシラサマとして侍を崇め、娘は神の使いとしてこの世を去った。こんな感じでどう」

酔いに任せて、だらだらと講釈を述べてみたが、楓は不服そうである。

「それは、ちょっと違います。やはり、おしらせまは最初から神様なんです。だから、牧村さんの考えは違います」

楓は少し酔っているのか、とろんとした目になり、喋り方も説教に聞こえない。

「そうかな、昔話ってさ、案外悲しい現実が入り混じっていたりするじゃない。だから、こんな考えもありかなって思ってね。それから、寒戸の婆にしても現代的な解釈すると、納得出来るんだけどな」

「何ですか。現代的な解釈って、聞いてあげるから、素直に言ってごらん。また変なのだったら、許しません。覚悟して話すように」

キャラが変わってきたような気がする。

「それじゃあ、言わせてもらいますが、寒戸の婆で大事な事は、神隠しにあったってとこだよね。そこが、僕の想像力を膨らませた、一番の原因なのですよ。はい」

「はいはい。つべこべ言わずに、とつとと話しなさい。もう一本飲もうね」

気がつけば、楓の横にはビール瓶がごろごろと転がっていた。何本飲めるのだ。

「では、ある日の夕方、若い女性が梨の木の下で誘拐される。残されたのは、一足の草履のみ。どこを、探しても見つからない。数年が過ぎた頃。年老いた彼女が戻ってきた。だが、彼女は家族に一目会うと、何処かに消える。これは、誘拐され、その当時の遊郭に売られたのではないか。そして、遊郭の年季が明けると、彼女は家族のもとへ。しかし、実際に帰ったはいいが、これまでの事情を鑑みるに、家族には話せない。そこで、彼女は再び姿を消す」

ここで、一気にグラスに残っていたビールを飲み干すと、楓の様子を伺った。

「ふうん。まあ、さっきのよりはマシかも。

確かに、そんな事もあったかもしれない。実際に、この遠野で似た話があったようだし」

いきなり、怒鳴られるかと思いきや以外にも理解を示してくれた。

でも、何だろう。この話には、心の奥底に訴えてくるような感じがある。何故？もう一度、寒戸の婆の一文を思い返す。昔に何か関係しているような。

「牧村さん。どうかした。また、新たな想像でもしている。黙っているとつまんないよ」

楓の声で我に帰るが、言葉が見つからない。

「あっ、いや。何だろう」

「もしかして、酔った。まだまだ、夜は長いよ。さあ、飲もう飲もう」

さっき、空になったグラスにビールを注いでくれると。自分は手酌でビールを注ぎ飲む。

「ありがとう。それが、少しこの話が気になって。前にこんな話があったような」

「えっ、遊郭の話。スケベだなあ」

「いやいや、そうじゃなくて」

そうじゃないんだ。何だろう。自問自答しても何の解決策も出てこない。

「んじゃ、誘拐でもされた」

楓はグラスの縁を指でなぞりながら言う。

「誘拐、誘拐。いや、違う。僕は誘拐された事は一度もない。でも、誰か・・・そう。身近な誰かが・・・思い出せない」

喉まで出かかっている、というのはこう言う事か、何でもどかしいんだ。

「何を、一人でブツブツ言ってんの。やっぱ酔ったんじゃないの、牧村さん」

つまらないと言わんばかりだ。

「嗚呼、ごめん。気になるとつい、周りが見えなくなって、本当にごめん」

考えるのは一旦中止。明日また考えればいい。また違う考えも浮かぶかもしれないし、そう考える事にした。

「よし、ではもう少し飲みますか」

その時だった。額の傷が妙に痛み出した。

「痛っ」

「何、どうしたの。大丈夫」

楓が真剣な表情になる。

「それが、古傷が痛みだして」

物凄い痛みが襲う。痛みのせいで、テーブルのグラスを倒してしまい。楓が慌てる。

「本当に大丈夫、今日は休んだ方がいいかもね。飲み過ぎたのかもしれないし。ねっ、今日は寝た方がいいよ」

本気で心配していた。

「嗚呼、ありがとう。楓さん。でも、聞いてほしい。やっぱり、あったんだよ昔。僕の身近な誰かが、その昔それらしい何かが。その誰かは、まだ思い出せないけど、確かに何かが起きた。それだけは確信が持てる。そう、18年前のあの時、僕が目覚めると、目の前に母が居た。そして、こう言った。（あなたは、助かったの。だから、一生懸命生きるの）そう言った母を思い出した」

「どう言う事。ねえ、牧村さん」

楓の言葉に返す言葉が浮かばない。けど、あの頃の僕に何かが起きて、大事な何かを失った。そう、大事な何かを・・・

妖怪（3）

寒戸（登戸）の婆

黄昏時に

女や子供が家の外に出ているものは
よく神隠しにあうことはよその国々と同じ
松崎村の寒戸というところの民家にて
若き娘
梨の木の下に草履を脱ぎ置きたるまま
行方知らずなり
三〇年あまり過ぎたりしに
ある日
親類知人の人々その家に集まりてありしところへ
きわめておいさらぼいてその女帰り来たれりいかにして帰って来たかと問えば
人々にあいたかりしゆえかえりしなり・・・

柳田國男 遠野物語より

追憶（１）

早朝のニュース番組で、昨日遠野で起きた事件を報じていた。（昨日未明。山形市から観光に来ていた男性Kさん（29歳）が何者かに刃物で刺され重体。警察の捜査にも関わらず犯人は依然逃走中。等々）

「犯人は、捕まっていないみたいですね」

テレビを見ていた楓が言う。いつの間にか、食事は僕の部屋が定番になりつつある。

僕は、昨晚の事で楓に色々迷惑をかけた事を気にしてか、声をかけるのを躊躇っていたが、今の一言で気が楽になる。楓本人は気づいていないかもしれないが、繊細で人を気遣う細やかな心を持った娘だと僕は思った。

「そうですね。早く捕まれば、彼らも安心するのでしょうか」

ここで、話を終わらせると昨晚の事が、言いづらくなると思い、言葉を続ける。

「ところで、楓さん。昨日はすみませんでした。何か、酔っていたみたいで、いろいろ変な話をしてしまったようです。本当に、ごめんなさい」

昨晚の事を、楓に謝罪する事が出来た。だが、酔っていたから、あんな話をしたのではない。母の、あの言葉を思い出した時、確信が持てた。けして、幻想ではないと。

「嗚呼、全然。気にしないで下さい。でも、

あの話が本当だとして、これからどうするんです。身近な誰かが誘拐されたかどうか、調べるつもりですか」

楓は、けろっとした調子で言うと、調べるかどうかを聞いてきた。確かに、今更だとは思う。だからと言って、調べない訳にはいかない、そう思えた。

「ええ、そのつもりです。僕があ言葉を聞いたのが、病院のベッドで目を覚ました時なので、10歳だったと思います。その辺りから調べようかと」

10歳といえば、18年前になる。事件があったとしても、既に時効を迎えている。

「病院のベッド？何か病気でもされていたんですか」

不思議そうな顔つきでこちらを伺う。

「ああ、そうじゃなくて。頭を怪我して、入院していたんです。けど、どうして怪我したかはわかりません」

「えっ、どう言う事です。わからないって」

「それが、記憶を失くしてしまして。頭を打ったせいなのでしょうね。病院の先生に聞いた話では、怪我した日の前後一か月分全てらしいです」

他人事のように話すのは、本当に聞かされた話だからであって、普通は可笑しな話である。

「そんな事って、本当にあるんですね。私はテレビの中の話とばかり思っていました」

確かにそうだ。実際に体験してみないと、この感覚は理解しがたいと思う。

「ええ、その当時の僕なんか、まだ10歳ですから、特に理解出来ませんでしたね」

二人顔を合わせて笑った。本当に可笑しな話だ。けれど、こうして笑っていると気が和む。楓というせいなのかと僕は思った。

「では、これからその事について、調べるんですね」

目を輝かせて言ったのけた。

「あっ、いや。それは、取材がひと段落してからでないと、先輩・・・じゃなく、笠井さんに叱られますから」

そう言った後の、楓のしゅんとした顔が印象的でならなかった。

「そうですか、残念。あっ、いや、今日はどちらを取材します。そうだ、伝承園なんてどうです。オシラサマとか佐々木喜善の記念館なんかもあるみたいですし、ね」

残念という言葉が引っ掛かりはしたが、それは無視する事にして。そう言えば昨日は、観光地を飛び越えて行った事を思い出す。

「そうですね、昨日は飛び越えて観光してしまったので、そちらから行ってみますか」

追憶（2）

それから僕らは、340号線沿いを（追分の碑）（キツネの関所）と、昨日見られなかった場所を経て、遠野伝承園を目指した。

乗込長屋で受付を済ませた後、右手にある佐々木喜善記念館から見て回る。

「凄いですね。1750年頃に建てられたんですって」

菊池曲り屋を目にして楓が歓声を上げる。

菊池曲り屋は、最も古い時期の建造物として国の重要文化財にも指定されている。

「そうですね。確かに見事です」

二人で中へと入り、懐かしい風景に感動を覚える。こんな感じだった。

「楓さん。やはり昔の家はいいですね。僕の家もこんな感じだったんですよ。さすがにこんな立派ではありませんでしたけど」

楓は驚いた。僕の家が、かやぶきで出来ていた事に。

その後は、しばらく田舎の家の話をした。風呂で火傷した事。天井から、蛇が落ちてきた事。笑ったり驚いたり。

曲り屋の奥の薄暗い廊下を抜けると、そこにオシラ堂がある。6畳程の狭いスペースに、千体のオシラサマが祀られている。色彩豊かな空間に圧倒された。

「うん。やっぱり、昨日の牧村さんの想像は間違っています。オシラサマはちゃんとした神様なんです。ほら」

楓は、ほら御覧なさいと訴える。

「もう解りましたから、そろそろご飯にしましょう。長屋の隣で、食事が出来るみたいですから」

空腹を満たせば、怒りが和らぐかと思い。

食事に誘う。

食事に向かう途中、写真を撮り忘れた事に気づき、楓を先に向かわせ。オシラ堂に戻った時、携帯が鳴りだした。見ると非通知である。誰だとは思ったが、出る事にした。

「はい、どちら様」

警戒して、名前は告げなかった。

（ひっひっひ、牧村さん。俺の事わかる）

その声は、男か女かもわからない声で、頭から馬鹿にした態度で言っている。

「あんた誰」

僕は、イラつきを抑えて次の返答を待つ。

（はあ、まだわがねの。こりゃいい。18年もの間思いだせねなんて、傑作だ。ずっとそうしてろ。ひっひっひ。ツーツー）

「おい、お前。誰だ」

クソッ、言いたいだけ言って電話を切りやがった。いったい何者だ。18年前って言ったら、僕が怪我して記憶を失った頃。

あまりに唐突な電話にイラつきを覚えながらも、楓の待つ食事処へ向かった。

食事中、先程の電話の事を楓に伝えた。伝えたところで、何も解決する訳でもない。イライラが募るばかりで仕方がなかった。治まりのつかない感情を、何処にもぶつける事が出来ない自分がいた。それを、感じ取ったのか、楓は、言葉を発する事がなかった。

しばらく考えてから、楓にこう告げた。

「楓さん。申し訳ないんですが、やっぱり昨日の事調べてみます」

「はい、わかりました。そうこなくちゃ」

「えっ」

以外にあっさりを受け入れてくれた。

「ありがとうございます。なので、一旦宿に戻ります。その後なのですけど。一人で申し訳ないと思いますが、後で埋め合わせはしますから」

「大丈夫です。千里さんも居ますので」

見ると鞆から、頭だけ出した妖怪千里が僕を睨んでいた。

「ははっ、そうですか。それじゃあ行きましょうか」

「はい」

こうして僕らは宿へ戻る事になる。

宿に着いてすぐ。笠井に電話した。

「あっ、先輩。牧村ですけど」

（おおっ、陽輔。取材は順調か？）

軽い口調だ。今日はツイてる。機嫌がいい証拠だ。

「実は、お願いしたい事が出来まして、聞いてもらえます」

さりげなく言ったつもりだが、どう返ってくるかが心配だった。

（おっ、何だ。朝のアレか。それならもうやっているぞ）

朝のアレとは、何の事だろう。

「先輩、どういう事です」

（・・・ん、だから、楓からの話だろう。ちゃんと調べているから、心配するな。俺だって忙しいのに18年も前の事調べさせられて大変なんだぞ。楓に言っとけ。しかし、お前が、ガキの頃事件に遭遇してようとは思わなかったな）

18年前。事件・・・もしかして、楓さんが先輩に頼んだのか。ありがたい。

「じゃあ、今先輩は僕の事を調べてくれているんですね。すみません。事件があったかも曖昧なままなのに」

（ああ、それはいいよ。朝一に楓から電話があって、お前の事だって言うものだからな。でもなあ、アバウトすぎて、絞りきれないのが現状だ）

そうか、楓さんは僕がどこに住んでいたかも知らない訳だから、当然かもしれない。

「なら、先輩。T市T町で調べてもらえますか、季節まではわからないのですが・・・」

（そっか、お前らの頼みとあれば仕方がない。期待して待つてな）

「はい、よろしく願いいたします」

電話を切った後、少し先が見えた気がした。

楓さんと、笠井に感謝する気持ちで、いっぱいになる。

その後、笠井からの連絡が来たのは、夜遅くの事である。

記憶（１）

9時を過ぎた頃、待望の電話があった。

（おう、陽輔か）

いつもの調子で、笠井の声が受話器から響いた。

一緒に笠井からの電話を待っていた楓にも聞いてもらおうと、携帯をハンズフリーにして、テーブルへ置く。

「はい。僕です」

不安と期待が入り混じり、言葉が続かない。

それを察したのか、神妙な響きの声で調べてくれた事実を話してくれた。

（嗚呼。結論から言うと、お前は確かに事件に巻き込まれていたようだ。18年前K新報にこんな記事が掲載されていた。1992年8月10日夕刻。父であるMさんが、いつまでも帰らない兄妹を探しに付近を歩いていると、息子Yさん（10）が血だらけで倒れているのを発見。救急車で病院に搬送されるも意識不明の重体。なお、Yさんは、犯人と思われる人物に頭部を殴打されたとみられる。それと、同時刻にいなくなったと思われる妹Aさん（6）を・・・）

「兄妹、妹？」

僕に妹が居た。そんな・・・何故、こんな大事な事を今まで忘れていた。

（嗚呼、お前には妹さんが居たみたいだ）

頭が混乱する。

（話。進めてもいいか）

何も答えない僕に、笠井が告げた。それでも、言葉が出てこなかった。

（ん、うん。同時刻にいなくなったと思われる妹Aさん（6）を捜索するも未だ発見できず・・・一応、知り合いの警察にも確認を取ったが、間違いなく、お前と、妹さんだ）

笠井も言いづらかったのだろう。ここまでしゃべり終わると沈黙した。

「そうですか、やはり」

言葉が見つからない。

（嗚呼、残念な結果ではあるが、状況から考えても、お前の妹さんは・・・）

笠井の言いたい事は痛いほど解った。

「ええ、そうですね」

（それと、詳しい情報は、メールで送っておいた。その中に、妹さんの写真もあるから、確認してくれ。陽輔、気を落とすな）

「はい。わざわざすみませんでした」

この後、電話を切った。

しばらく、放心状態にいる僕を見かねてか、そばで控えて居た楓が声をかけてくれた。

「牧村さん。大丈夫ですか」

「あ、はい。えっと、メール見ないと」

「私がやりましょうか」

「あ、はい」

何事もなかったかのように振舞う彼女を、ただ眺めているしかなかった。

「これですか」

促されるように、モニターを見ると。そこには、幼かった頃の僕と、忘れ去られた妹、（茜）の姿が映し出されていた。

モニターの中の彼女は、おっぱ頭で、前歯が少し欠けていたが、大きくなったらきっと美人になっていたであろう。均整のとれた顔をしている。

その姿を見ているうちに、一筋の涙が頬を流れ落ちる。悔しかった。こんな大事な事を忘れていたなんて、自分自身を呪った。

どれぐらい、モニターを見つめていたのだろう。

「じゃあ、今夜は部屋にもどりますね。牧村さん、おやすみなさい」

気を使ってくれた彼女に、挨拶したかもわからず、妹を見つめていた。

あれから、ずっと、笠井から届いたメールを、繰り返し読み続けた。妹が当時着ていたとされる浴衣の写真。妹の顔写真。

深海に沈んでしまった真珠でも探すかのように、自分自身の記憶の奥底を手探しし続けた。息が続く限り探していればきっと見つかる信じ。

そして、深海の奥底で光を見た気がした。

僕はなぜあの日

親の言い付けを聞かずに家を飛び出した。

なぜあの日血だらけで倒れていた。

なぜあの日の記憶を失った。

記憶（2）

アイツが小さな妹に馬乗りになり、汚らしい手で妹の細い首に手を押し当てている。

妹は僕を見て何かを言っているようだが聞き取れない。目から小川のせせらぎのように涙が溢れている。黄昏に染まる妹が陽炎のように揺れていた。

「茜を放せ」

男に浴びせるように言った。言葉が出ているのかも解らないまま、妹のもとへ駆け寄る。その瞬間、目の前が真っ白になる。

脳自体が震えているようだ。妹を目で追うが、霞がかった世界は晴れてくれない。

突然、突風が吹き荒ぶ。真っ白な世界が徐々に晴れたかと思うと、真紅の世界へと一変した。

その中に、妹が居た。壊れかけの8ミリ映像を見ているかのように、妹は動くことはなかった。もう少しで手が届きそうなのに、触れることの出来ないもどかしさ。

その時、アイツが立ち上がり、ぐったりとした妹を抱き抱え立ち去ろうとした。

僕は妹を取り返そうとするも、全身の力が入らない。どうやら男に叩き伏せられたようだ。真紅の世界が、僕の頭部から出る血だと気づいた時にはもう遅かった。酸欠のようなけだるさに襲われ、静かに気を失った。

そして一か月を過ぎたある日。病院のベッドの上で僕は目を覚ました。あの時の記憶と大事な妹、茜の一切の記憶を失って。ふと、カレンダーを見ると、1992年とあった。

その時の両親は、何も話してはくれなかった。

目を覚ました時に、母はこう言った。

「あなたは、助かったの。だから、一生懸命生きるの」

嬉しさと、悲しさの入り混じった表情で、そう告げた。この時、妹のことは一向に進展していなかったからだろう。誘拐とも失踪とも、わからないまま。

当日、僕を病院に運んだ父は、祖母と母を残し、直接警察に妹がいなくなった経緯を伝えた。それによって、当時の警察が誘拐と失踪の両方で捜査し始めた。

当時の田舎では、失踪した人間を警察と地元消防団で捜索していたのだが、もし、そこにアイツが居たら、妹を隠そうとするなら造作のない事だったろう。

自宅にいた警察は、誘拐事件として考えていたようだが、誘拐である電話一本かかってこなかった。妹を既に殺したアイツが、今更電話をかけてくるはずもないのだから。

そこで、一緒にいたと思われる僕の記憶に警察は頼らざる負えなくなったのだが、肝心の僕は、一か月も目を覚まさない。やっと目を覚ましたと思ったら、一切の記憶を失っていた訳だからドン詰まりである。

後で聞いた話だが、あの日、帰らない僕らを探していた父が、血だらけで倒れている僕を見て病院に運んでくれた。父が来なければ確実に死んでいたと。

その後、事件に一切の進展を見せる事無く時間が過ぎて行った。

事件をきっかけに、僕の家族はバラバラとなり、父は家に帰ることが少なくなり、その後二度と家に戻ることはなかった。続いて、祖母が病気で亡くなり。母は、精神的にまいってしまったのか、父との協議離婚を済ませると、生まれ育った田舎を後にする。

後に、母は再婚するも、再婚相手と僕のそりが合わず、僕も母の元を去った。こうして考えてみると、母は可哀そうな人だったのだと思える。愛する娘を失い、次々と家族をも失っていったのだから。

やっと理解できた。

僕はあの日、着付けを終え帰って来る妹を迎えに行こうとしていた。

だいぶ約束の時間を過ぎた事に気づき、慌てて家を出ようとした。その時母が言った。父に頼むから行かなくていいと。僕はそれを無視して出かけた。

その時妹は、既に一人家路を急いでいたに違いない、早く、自慢の浴衣を見せたくて。あんな事になるとは、思いもせずに。

僕が妹に会った時には、既に奴と遭遇していた。状況も解らないまま、妹を取り返そうと、飛び掛った時、右の額を石で殴られた。それでも必死に、妹からアイツを引き離そうと出来る限りの事をした。その抵抗も空しく、次の後頭部への一撃で卒倒した。

自分の眼の中に血がにじんできた時。後悔でいっぱいだった。時間に遅れる事無く迎えに行っていれば妹は殺される事もなかった。

僕のせいだと思った。僕が殺した。

だが、それよりもアイツが憎い。時効を迎えようとも、この手で決着をつけてやる。たとえ刺し違えたとしても、必ず。

「痛っ」

膝に痛みを感じ意識がはっきりとした。眼をやると、猫の千里が膝元に居座っている。なぜここに居るかよりも、爪を立てたこいつが憎らしかった。

「爪を立てやがったな。まあいい。お前は不思議な奴だ。もしかして、本当の妖怪猫又か」

我関せずの黒猫は、大アクビ。

「どうでもいいか。でも、幻想と記憶は繋がった。それを、明日確かめに行く」

ずっと、千里の頭を撫でた。すると千里は、満足げに大きく伸びをし、とことこと部屋を後にする。見るとドアに隙間が出来ていた。

「閉めて行けよ」

いつの間にか朝を迎えていた。

モニターの中で笑う妹が居た、何時までも変わる事なく。

楓が来るのを待って、昨日思い出した事を全て伝えた。楓には、いくつか手伝ってほしいという事も。

「と言う訳で、お願いできますか。一応、伊藤にも伝えておきますので、わかり次第。楓さんにも、電話連絡しますから」

「はい、それぐらいなら大丈夫です」

「でも、犯罪ですよ。一応。」

「ええ、解っています」

犯罪と聞いても、驚かない楓に少しまごついていると、不思議そうな顔で見つめられた。

「では、お願いします。僕は確認の為に、宮城に行って来ますね」

「はい。気をつけて下さい」

そうして、僕は宮城へと車を走らせた。

僕は再び生まれ故郷に立っていた。目の前には、以前住んでいた家がある。今回は車から降りるとじっと辺りを観察する。

この辺では、ようやく桜が咲き始めてきたところで、苗木で植えた桜も、僕の背丈ほど伸びて生き生きとしている。

さすがに、今日はあの視線を感じる事はなかった。だが、目的の一つを見つける事は出来た。辺りに人がいない事を確認すると、一枚の写真を撮る事に成功した。

「3日も過ぎれば、ああなるよな」

一人呟くと次の目的地、叔母の家へと向かう。

あの、多目的センターのすぐ近くに、叔母の家がある。少し高台になっている家がそうだ。上り坂を歩いて行くと、左には家庭菜園ほどの畑があり、ナスの苗が植えられているのがわかる。玄関に着くと、呼び鈴がないので直接声をかけてみる。返事がない。

「ごめん下さい。誰か居ますか」

(はあい) 遠くの方から声が聞こえた。

しばらくして、あの、叔母が現れる。

「あれ、陽ちゃん。寄ってけだの、まんず、上がらいんちゃ」

叔母は、先日と同じような割烹着姿で、家へ招き入れてくれた。

「うん、ありがとう。今日は寄らせてもらうよ。それと、これ、お土産」

叔母に、酒まんじゅうを手渡すとすごく喜んでくれた。招かれるまま、掘り炬燵に入ると、叔母に聞きたい事があると伝える。

「何だ、聞きてえごどって」

「それなんだけど、18年前の僕の事件の事なんだ。覚えているかな」

それを聞くと、一瞬暗い表情を浮かべる。

「ああ、覚えでるども。んでも、何でだ」

「ちょっと、確認したくて今日来たんだ」

「んだら、思い出したのが」

「うん」

うなずくと、叔母はゆっくりと話してくれた。

（あの時は、お盆前で夕方までかなりの暑さが続いていた。最初に聞いたのは貴方の、お母さんからの電話。陽ちゃんと茜ちゃんが二人とも戻らないのだけど、そっちに行っていないかって事だった。居ないと電話を切ってしばらくしたら、救急車の音が聞こえたので、もしかしたらと思ひ。貴方の家に行ったら、血だらけの貴方が運ばれるところだった。けれど妹の茜ちゃんは、その場に居なかった。そのうちに警察が来て大ごとになり。私は一旦家に帰った。後で聞いたら、茜ちゃんは、誘拐されたのではと、その時貴方が巻き込まれて大怪我を負わされたのではってね。その後、警察と消防団で茜ちゃんを捜索したけど見つからず。諦めた頃。貴方のお母さんが、集落の人達を集めて、茜ちゃんの事は貴方に話さないでほしいと、土下座して頼まれた。貴方は、犯人にあんな惨い事をされ、記憶をなくし。そのうえ、妹まで居なくなると解ればどうなるかしのれない。だから絶対に話さないで下さいとね。だから、今まで話さなかった）

そう、叔母は話してくれた。あの母が、みんなにそんな事を頼んでいたとは知らなかった。今更ながら、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。けど、ここでしんみりしている暇はない。アイツを引きずり出すまでは。

「ありがとう、叔母ちゃん」

「うん、うん。あんでもねえ。ほがには」

「あ、それじゃあ。捜索に行った人達って、警察と消防団だけ」

「いやあ、あんどぎは、おらいのおどつつあんなんかど、この辺のわけ者らも一緒だったな」

「そう。最後にもう一つ。事件後なんだけど、捜索した人達の中に、指を怪我した人っていたかな。例えば、大きな傷が出来ていたとか、何でもいいのだけど」

「んん、傷なあ。傷ではねげんとも、指落どした人いだな」

「落としたり言うのは、欠損って事かな」

「んだ」

「それ、誰」

「ああ、田崎さんだよ」

「あの」

「んだ。あそごさもあつたべ、あの治さん」

「ありがとう。叔母ちゃん」

「いいのが」

「うん」

これでつながる。やはりそうだった。やっと見つけた。

この後、叔母に別れを告げ、そのすぐ後に何件か電話確認し、最後に楓に電話した。

「あっ楓さん。わかりました。名前は田崎治です。はい、それと、メールしといたので、それをお願いします」

その後、岩手の旅館に戻ると今までの取材記事をまとめ。それを、東京の笠井にメールで送った。それから、もう一つ記事を作り始める。（これを笠井に預けておけば何とかなる）そう思った。

その頃、楓はまだ部屋に戻っていなかったので、何処か観光しているのだろう。

これからどうすべきか考え込んでいた時、楓が部屋を訪れた。手には封筒を抱えている。「牧村さん、お待ち兼ねの物届いたのでコピーしてきました」

ニッコリと微笑むと、僕に手渡してくれた。「あれ、伊藤には僕にメールくれるよう頼んでいたんですが」

思わず、テーブルのパソコンを見る。

「えっと、そうだったんですか。多分直ぐにコピーしたいから、私の方に送るよう頼んだからかな。へへっ」

最後の笑いが気になるが

「はあ、そうですか。それにしても、早いですね。伊藤の奴ちゃんと仕事してんのかな」

頼んで半日も経たないうちに、結果がでるとは思えなかったので、かなり無理させたかと心配になる。

「ああ、ちゃんとしてると思いますよ。牧村さんの頼みだから、頑張ったんじゃないですか」

「そうですね。ただ、無理させたかと心配で」

「それより、届いた物。確認して下さい。間違っているといけないので」

楓に催促されるまま、手元の封筒を開いた。

そこには、数枚の写真。写っているのは、車を運転中の田崎。そして、ナンバープレートに日付、時刻、最後に撮影場所。思っていたとおりの物は、手に入れたがこれをどう使うか考えていると。

「この人が茜ちゃんを」

写真を覗き込む楓が、僕の間近に居る事にはっとする。

「あっ、ええ、まあ」

「で、これを使ってどうするのです。脅迫でもしますか」

「そうなんですよ。どう使うか・・・脅迫か。えっ、脅迫」

楓を見るとキョトンとしている。

今朝といい、今といい、彼女の度胸のよさには感心する。そんな性格を最近は気に入り始めている。

「楓さん、それでいきましょう、脅迫で。あの資料にしても、違法に手に入れたのですから今更気になる必要ないですからね」

「はい、そのいきです」

そうだそれしかない。証拠も何もないのだから、脅迫してでも、茜を探し出す。

再開（１）

「あ、もしもし、T役場さんですか、私K新報の鈴木と申します。実は、今回そちらでご活躍されている、田崎さんに取材を申し込みたいのですが、もしいらっしゃるなら少しお話を伺いたいのので、田崎治さんにつないでいただけますか」

僕は、相手に話す隙を与えず、言いきった。（嗚呼、はい。少々お待ち下さい）

相手は、何も考えず電話回線を田崎へと切り替えてくれた。

（はい、お電話かわりました。田崎ですが）

田崎がでた。普段は、標準語かよ。

「田崎さんですか、私、取材を申し込みたくて電話した者なのですが、お話よろしいでしょうか」

軽い調子で、少し様子を伺う。

（はあ、K新報の方だとか。どのような取材でしょうか）

まるで疑う様子がない。

「はい、申し送れましたが、私し牧村陽輔と言います」

さあ、どう出る。お前は今、僕の名前を聞いて何を考えている。

しばらくの沈黙の後、田崎は絞り出すかのように。

（き、君は先程、鈴木と・・・）

名前を聞いただけで動揺している。これなら、話しにのってくるか。

「ああ、申し訳ありません。先程は間違っペンネームを言ってしまったもので、恐縮です」

田崎、次はどう応える。

（そ、そういう事なら仕方ない。で、君は何を聞きたいのだ）

「はい、貴方がどうしてそこに平気な顔でいられるのか」

（何を、君は言っているのだ、失敬だぞ）「失敬とは、聞き捨てならないお言葉ですね。お忘れですか僕の事」

田崎、賽は投げられた。

「な、何を。ふざけた事を。切るぞ」

想いを巡らすのもいいが、このまま切れるのか。

「ふざけていません、田崎さん。僕は、T町出身の牧村陽輔です。貴方もご存知のはずですよ」

（お前の事など、知らん）

「そうですか、僕は思い出したのですけどね」

田崎の応答がなくなる。ようやく自分がおかれた立場が解ったようだ。

（君は、何が言いたいのだね）

「ええ、ですから取材を申し込みたいと」（何だと）

「18年前の事件の事で」

（18年前、事件。そんな昔のお前らの話しなど知らん）

バカが。

「それで。取材を受けていただけますか」

この時、僕は覚悟を決めた。

(君のような、人間の取材を受ける気はない)

「そうですか。では、明日の午後3時。あの場所でお待ちしております」

僕は、田崎の言葉を無視した後、すぐに電話を切った。コレでいい、奴はきっと来る。

あとは茜の為に出来る事をやるだけだ。

僕がこの場所に立つのは何回目だろうか、幾度となく此処には来ていた。だが、記憶を取り戻してからは2回目になる。春の心地よい風が柳の木を通り抜ける度、簾のような枝が波打っている。

胸元から煙草を取り出し。マッチを擦り、口元にあるフレッシュメンソールの先端に火を点ける。煙を吸い込み吐き出す。こんな当たり前にやっている行為が、当たり前でなくなる。それが死。

死を眼前にし、その遺された者は悔やみきれない想いを胸にしまいこんで生きていく。だが、それも今日で終りだ。

月命日である4月10日、奴と決着をつける。

時刻は3時を過ぎている。

僕は、吸っていた煙草を携帯灰皿へとねじ込むと、先程から僕に声をかけている男を無視し続けるのも限界かと思い、視界に入っていた田崎を見据えた。

両手には黒い革手袋をしている。あれが、欠損した指を隠す道具だとしてしたのは、ほんの少し前だ。

「君は、人を待たせておきながらその態度とは、何様のつもりだ」

田崎は、矢継ぎ早に言ってきた。

「それでは、お聞きします。貴方はどうして此処に」

憎悪に満ちた視線を向ける。

「ど、どうしてだと、君が脅迫めいた電話で此処に来いと呼び出したのだろう。ふざけているのか」

「脅迫。誰が」

「貴様だ、牧村陽輔。昨日電話で話しただろう」

だいぶいらつき始めたか、言葉が感情的になる。

「はあ、確かに僕が牧村陽輔です。で、貴方は」

あえて相手を挑発する。この程度で怒ってもらっちゃ、困るのだがね、田崎。そんな事で僕の気が治まるはずないのだから。

「な、田崎に決まってんべ。馬鹿にすんのもいい加減にする」

やはり感情が高ぶると、方言がでるらしい。息も荒くなっているのか、肩を大きく揺さぶって

いる。

「はい、知っていますよ。田崎治さんですよ、現町長の。ご活躍ですね、今度は市長選ですか・・・」

それを聞いた田崎は、顔を真っ赤にして、鬼の形相さながらである。

「おだずなよ」

「いえ、ふざけた訳ではありません。確認したかっただけですから」

感情をコントロール出来ないのか、田崎は僕の胸倉をつかむ。

「オメエは」

「あれ、そんな事をしていいのですか。貴方が今まで築き上げてきたモノが不意になりますよ」

この言葉に動揺したのか、つかみ掛かっていた手の力がふっと消える。

「少し落ち着いて話しましょうか。田崎さん」

田崎は、少し離れると、充血しきった目を僕に向ける。

「それでは、本題に入りましょう。18年前の事件について、お聞かせ願えませんか」

「ふん。そんなもんは知らんと言った」

あくまでも、白を切るつもりだ。

「では、質問を変えます。貴方は何故此処へ来たのですか」

「それは、オメエが呼び出したがらだべ」

「おかしい話しを言いますね、僕は、あの場所でとしか言わなかった。それなのに貴方は、此処に居た」

「それは」

田崎は言葉に詰まり、視線も定まらない。

「貴方は知っていたからこそ、此処に来た。惚けるのは止しましょうよ」

「ああ、確かぬな。だが新聞で知った事を思い出すたまでだ。オメエが、18年前の事件がどうのこうのって言うがらな」

田崎は、陰湿な目で僕を見据える。これでどうだと言わんばかりに。

再開（２）

＊これ以降標準語表記＊

しかし、やっとの思いで見つけた言い訳が、これでは話にならない。

「新聞に、此処の場所までは書かれていません。それに、１８年前のあの日貴方は、捜索隊に加わった事も調べは着いている」

「なら、その時にでも聞いたのだろう」

「誰に、どのように知ったと」

「捜索隊の誰かから・・・この柳の下であんたが血だらけで倒れていた。一緒にいた妹も行方知れずだから付近を捜せと」

田崎は、視線の定まらぬまま、説明を続ける。しかし、自分の間違いさえも気付いていない様子だ。

「まだ言いますか。此処は、僕とその家族、警察しか知らない。捜索隊は一般市民であって、警察が捜査状況を教えるはずがない。知っているとすれば、犯人しかいません。それに、その柳の木の下に居たのは僕じゃない。妹だ。僕は、そこで一回目に殴られ、犯人が妹を連れ去ろうとした時、もう一度飛び掛かり、左手の小指を引き千切らんばかりに噛んだ。その時に、後頭部を殴られ倒れ込んだのが、ここだ」

すたすたと歩いて行き、橋のたもとの道端を指し示した。

そろそろ、田崎の言い訳にも厭きた。その口を二度と聞けないようにしてやろうか、とも考え始めたが。まだ、目的は果たされていない。もう少し。

「そして犯人は、そのまま逃走した。だが、その時の傷がもとで、左手小指を欠損した。どう言う意味か解りますよね、田崎さん。貴方の事を言っているのですよ」

「こ、この指は、機械に巻き込まれて失くした。何の関係もない」

「では、何故僕を知っていました。先程貴方は、牧村と確かに言った。僕が名乗る前に。あの日、貴方は僕と言い争った後、もしやと思ったのでは。そして、後を付け岩手で牧村陽輔である事を確認した。それに関しては証拠もあります。これは、遠野市の僕が泊まった旅館付近で撮られた写真です」

僕は、楓に頼んで手に入れた、４月４日に撮影された写真を見せた。そこには、田崎本人が運転する車。車種。ナンバー。日付。時刻。場所が記載されたものである。

「そんなモノが何になる」

吐き捨てるように言う。

「もちろん、こんなのはどうでもいい。確認の為です。証拠はココにありますから」

自分の頭を指差し言った。田崎、証拠なんてもうどうでもいいのだよ。茜の事件はもう時効だ。あんたは、何もわかつちやいない。

「そんなモノがなんの証拠になる」

「では、４月６日。貴方は何処に居ました」

「そ、それは、役場に決まっているだろう」

「いいえ、それは違います。あの時貴方は、遠野ふるさと村に居た。そして、僕を殺そうとした」

「何を言っている。あれはニュースで見たが山形の間人が刺されたはず。貴様に何の関係もないだろう」

「はい、残念な事に、あの方は僕の身代わりで刺されました。貴方にね。では、こちらも見てくださいか。貴方の家で撮った、車の写真。泥の取れなかった、ナンバープレートのです。それと、4月6日に撮影されたものです。これを、警察に証言すれば・・・」

先程の写真と同じ内容で、4月6日に撮影されたものを田崎に見せた。

田崎の表情が一変する。額には大粒の汗、唇がわなわなとふるえ始めた。

「しかし、僕も後から気付きました。宮城に戻ってみて初めて解りました。あの方が僕の身代わりだったって事。あの時、走って行く犯人の左手の小指がなかった。厳密に言うと、手袋が風で折れ曲がっていたのを思い出したのです。貴方の左手小指が欠損していると教えてもらった時になるほどと思いました。だが、なぜ僕を殺そうとしたのか、それが解った時は、あまりのくだらなさに驚きました。貴方もうすぐ、市長選ですよ。それが、動機だ。過去の犯罪を隠蔽し、スキャンダルを避ける為。そうですね」

顔面蒼白な状態で聞いていた田崎が、急に怒りをあらわにして僕の前に立つと、胸倉をつかんでこう言った。

「だからどうした。俺はやっとの思いでこの地位までこられた。それを守って何が悪い」

やっと素直になったか、田崎。だがな、まだ終わらず訳にはいかない。地獄に突き落とすまでは。

僕は、田崎の腕を力づくで引き離す。その際に先程から気になっていた、田崎のスーツの左ポケットのモノを、気づかれる事無く抜き取ると、素早く自分の懐に忍ばせた。

「そうですね。あの頃の田崎さんを知っている者にとっては驚きですよ。僕の家の人であった貴方は、自衛隊崩れで引き籠りだった。だが今は、現職の町長で、しかも今度は市長選ですよ。そんな時に過去の遺物が戻って来たとなれば。殺したくもなりますよね。だが、前は失敗した。次に狙うとすれば、僕が呼び出した、今日といったところでしょうか」

田崎は、全身が痙攣しているかのように震えている。まるで死人でもあるかのような眼差しは、すでに人ではないのかも知れない。

「貴様に何がわかる。この20年近く、私がどれだけ努力してきたか、それを、今更無に帰すわけにはいかない。例え何人殺そうと」

田崎の言った事は、本気なのだろう。茜を殺し、無関係の人を刺して、なおも、地位にしがみついているのだから。

先程から、田崎はしきりにポケットを探っている。目的のモノはすでに僕の懐にあるとも知らずに。あれは、感触からして凶器に間違いないだろう。やはり、僕も殺そうとしているようだ。だが、そう簡単にやられるわけにはいかない。

「お探しのモノは見つかりましたか」

不意に声をかけられ戸惑いながらも、凶器を捜す田崎を見ていると、不思議と哀れにも見えて

くる。

「何だと」

「だから、お探しのモノ」

僕は、田崎の凶器を手に持ち、ブラブラと振りかざし、見せつける。

「きっ、貴様。いつの間にそれを」

恨みの念が込められたようなその言葉に、今の田崎の心情が窺える。

「今更僕を殺そうとして、何になるのです。それより、取引しませんか」

僕は、さりげなく言ったつもりだが、田崎は疑っているのか、思考を巡らせているのか返答がないままだった。仕方なしに、こちらから話を付け加える。

「ですから僕は、18年前の事件も、今回の事も口外しない。そう言う事です。その代りと言っては何ですけど、一つ条件を聞いていただきたい。どうです」

「どう言う意味だ。金か」

お前と一緒にするなよ、田崎。こっちが下手に出ているうちに聞いてほしいものだ。

「はあ、ふざけないで下さい。僕は、茜を帰してくれれば、それでいいと言っているのですがね、もう勘弁してくれますか」

「ふざけているのは、そっちだろう。そんな事で済むはずがない」

こいつ、とことん腐っている。

「ざけてんのはどっちだ。ああ、おっさん。俺の言う事を素直に聞けばいんだよ」

田崎は、あっけにとられたのか、言葉も出てこない様子だ。僕にしても、こんな言葉使いをするのは十数年ぶりだ。よく、笠井にこのような言葉を使うとどやされた。だが、この際だ。

「おら、どうすんだおっさん。でなきゃ、今まで話した事を公表する。嫌なら従え。それも駄目つうなら。この場で殺す」

僕は、田崎が隠し持っていたナイフを首筋に押し当て、昔の自分を呼び起こすかの様に言い放つ。

田崎、これが脅迫って事じゃないのか。

「ほ、本当にそれでいいなら、従う」

先程までの田崎は、嘘のように消え、虚ろな目でこちらを見ている。

「ああ、本当だ。茜さえ取り戻せればそれでいい。だから、早く案内しろ」

だいぶ日が陰り始めてきた。急がないと。

田崎を先頭に、かつて澄んだ小川が流れていた川沿いの道を、下流へと歩き出す。ゆっくりと左へとカーブすると、懐かしい里やまが右に見えてくる。

田崎は少し先で歩みを止める。あの日僕らが言い争いをした場所だ。

「どうした。早く行けよ」

田崎を促す。

「いや、ここから山に入る」

低い、力のない声で田崎が言うと、そのまま小川を飛び越え里山へと入り込んだ。

再開（3）

まさかとは思ったが、あの時ここで僕を引き留めたのはそういう事だったのか。ここから先には、右の傾斜を行けば清水が湧き出るため池がある。しかし、そこは当時の僕でも膝ぐらいの水深で、茜をそこに沈めたとは考えにくい。なら、左の方へ行く事に。そこはかつて、僕らが、よく遊んだ場所。

思ったとおり、田崎は左方向へと歩み始めている。数十メートル程分け入った所に、落葉樹林に囲まれた、広場のようになっているところがある。そこを、目指しているのか。

「まだか」

その考えを払拭するかのよう、田崎へ言葉を吐きかける。

「もう少し先だ。こうツタが多くては、なかなか思うように進めないのだから仕方ないだろ」
苛立ちを隠せない様子だ。

今は里山に入り手入れをする者など誰一人として居ないのであろう。うっそうとした森をかき分け、進んでいくしかないようだ。

田崎、お前は今何を考える。かつて自分で殺した妹のもとへと案内をさせられている、この状況下で。

普通の心境でいられるなら、このまま後ろから刺殺してやりたいところだ。

しばらく歩いて行くと、やはり僕の考えが正しかったようだ。田崎が立ち止まり。

「此処だ」

そう告げた。

「クソッ」

なぜか、自分の意思に反し、その場に歩み寄っていた。

そこには、かつての様子をうかがわせる広場があった。僕らはよくここで遊んだ。今も同じように落葉樹の落ち葉に支えられ、ぽこぽこカタクリの花が群生していた。

幼少の頃の僕は、木漏れ日の差すなか、一つのカタクリに日光が差すか差さないかの間を見るのが大好きだった。

カタクリは春を告げる花（スプリング・エフェメラル）とも言われ、そんな小さな花を育むこの里山が本当に好きだった。

なのに、此処だったのかと気付いた時、涙が溢れ出てきた。

こんな小さな花の下に。

僕は振り返り、力のない表情で立ち尽くす田崎に、ありったけの憎悪を向けた。表情は虚で、笑っているかのようにも見えた。やはり殺すべきなのではと脳裏を過る。

「一つだけ答えろ、なぜあの日妹を殺した」

心の奥底にある悪魔のような自分が、今にも飛び出しそうになるのを抑えて言った。

「あっ、あの時は、あの子にいたずらしようとしたら、騒がれた。それでつい」

そんな事だろうとは思ったが、目の前で聞かされると、ますます心が揺らぐ。僕は、田崎の胸

倉をつかみ、自分もとへ引き寄せると、持っていないナイフを、奴の眼球の前に突き出し、努めて冷静に言った。

「どこだ」

田崎は何も答えず、右手で朽ち果てたクヌギの幹を指し示した。

付近にあった木に、軽くナイフを刺すと、幹の元へ向った。そこに静かにしゃがみ込んだ後、落ち葉にそっと手をそえる。

辺りにはカタクリの小さな花が、紫色の頭を地面に向けている。まるで、この地中にある彼女を見守っているかのようだ。

ひざまずいた格好で、落ち葉を両手ではらい除ける。腐葉土が見えると夢中で掘り返した。どれだけの時間がたったのだろうか。気付くと、両手が枯れ枝などで傷ついて、血がにじんでいるのが解った。痛みはまるで感じる事が出来ない。

再び土に手をかけた時、陶器のような冷たさを感じた。

目に映る物全てが現実だとは思わない、けれど、痛いほど伝わってくるこの冷たさは現実を物語っていた。

ゆっくりと、土を払い除けると、白い、小さな、小さな白骨死体が現れた。

わずかに残る生前の姿は端切れとなった浴衣。以前の彼女を目の当たりにしていなければ、気付かないほどに千切れていた。

片手に納まるほど小さな頭骨を胸に抱き抱えると、生きていた彼女に会えた。

「やっと会えた、茜。18年も待たせるなんて、酷い兄ちゃんだ。これからは、ずっと一緒だから」

その時、（とすっ）と後ろで音がした。

一瞬背中に熱さを感じ、振り返ると、田崎が笑っていた。

「待っていな」

田崎は、そう言い棄ててその場を立ち去った。

熱くなった背中を手で摩ってみると、ヌルとした感触があった。それが自分の血液である事に気づくと、田崎の行動を理解した。

まだ死ぬ訳には行かない。終わらせてはいけない。茜の無念を消し去る訳には。

僕は、茜の遺骨の下を必死に掘った。きっと奴は、僕も埋めるきだ。だとすると、スコップを取りに行ったに違いない。その間に何とかしないと。

やっと、茜を見つける事が出来たのに。必死で携帯が入るスペースを確保してから、内ポケットから携帯を取り出し、発信履歴で笠井をプッシュ。

血と泥にまみれた手が震え始めた。プップップの音かもどかしい。コール音が聞こえると、2コール目で笠井がでた。

「はい、笠井」

ありがたい。

「先輩。俺です」

「おう、どうした」

「先輩。何も言わずに聞いて下さい」

先輩の声に被せるように言う。

「やられちゃいました。刺されました」

「お前、今どこだ。大丈夫なのか」

笠井は慌てた様子で聞いてきた。

「先輩、俺のメール見て。それと、失くした物見付けました。やっと・・・」

時間が無いと思った。

「携帯、GPS・・・」

それだけ言い終わると、体が重く感じ始めた。

「おい、何を言っている。どう言う事だ」

笠井の声が遠くに聞こえた。僕は、そのまま携帯を切ると、マナーボタンを押し携帯を閉じる。と同時に茜の遺骨の下に起き、廻りの土をかけた・・・

「先輩、後よろしく」

田崎、これで俺の望みは総て叶った。地獄で待っている。

僕は、再び茜の遺骨を抱き抱え、静かにうづくまる。

導き（1）

フロントエンブレムにW。側面ボディーには、派手なメイド服姿の少女が描かれている。そんなワゴン車が、○号線を疾走していた。誰が見ても、オタク系の人々が運転しているのだろうと思いがちだが、運転していたのは20代前半の女子。

彼女は運転しながら、何かを叫んでいた。

「嗚呼、もう。あの場所って、何処よ。はっきり言ってくれないと解んないじゃない」

苛立つ彼女に反し、助手席には大あくびで黒い猫が鎮座していた。

彼女は、派手なワゴン車を急停車させると。「仕方ない、消費電力食っちゃうけど。エエイこの際だ」

運転席に居た彼女は一人つぶやき、おもむろに、後部座席のカーテンを開け奥へと移動した。

中は、医療設備を想わせる程の機械類が所狭しとばかりに据え付けられている。

よく観れば軍の監視モニタかと想われるもの数台、普通の端末機が2台、その他無線機類数台はあるだろうか。

「アンタ達、今回は人の命がかかっているのだから、しっかり働いてちょうだい。失敗したら、スクラップだからね」

どうやらマシンの事を（達）呼ばわりしている様子だ。変わった娘だ。

「いくよ。えっと、090の」

端末機に入力しているのは携帯番号のようだ。

「ヨシッ。ポチっとな」

全ての数字を打ち込むと（バリリ）とショート音。その後（ブーン）という音が車内に響くと機器類がいっせいに動き始める。

「さあ、頑張るのだ。野郎ども」

今度は（野郎ども）

しばらくして、モニタの一つに衛星写真が映し出される。山のようなのだが、その中心が赤く点滅していた

「何これ、山ジャン。付近に道は、在るには在るか。仕方ない、ナビに転送。待っていてね、今行くから」

その後、（ヴィン）と不快音と共に全ての機器が停止した。

「嗚呼、コラっ、役立たず。バッテリー切れすんなあ。転送、大丈夫だったかな」

彼女は、運転席に戻ると、ナビ画面にタッチ。

「よっしゃあ、イキテル」

彼女は、アクセルペダルを思い切り踏み込み、○号線を南下し続ける。

「大丈夫かな。無茶してないかな。ねえ、千里さん」

助手席の黒い猫に話し掛けているようだ。「アレ、もっと性能よくしとくんだった。後何キロ」

彼女は焦りからなのか、先程からしきりにナビを気にしている。

「電源入れときましようかね、千里さん。そうしときましよう」

一人焦る彼女を、ほんの少しだけ見ると、黒い猫は丸くなり寝てしまった。

「ひどっ」

その後、彼女はバックミラー横のスイッチを入れた。（ガァガァピッシャーガァーピシャー）
車内に無線音が響き渡る。

「後少いで、5キロ圏内に入る。そうすれば、詳細な場所が特定出来る。後ちょっとなのに」

ナビの残り距離数を、しきりに気にする彼女は、ハンドルを強く握りしめる。

その時、（シャーピピッ・・・。ああ、本当だ）車内に男の声が響いた。

「やたッ。牧村さんだ・・・ん、誰かと話している？あっ、あいつか。ヨシッ」

彼女は、車を停車させると再び後部座席へと消えた。

「ヨシシャ〜、詳細ゲット。今から行くから、待ってなさい」

奥から響き渡る彼女の雄叫び。

導き（2）

数時間前。某旅館。

「牧村さん。いよいよ今日だね。アレ、居ない。何処行ったのだろう」

牧村なる人物の部屋を訪ねた彼女は、辺りを見回す。視線がテーブルへ向けられた時、封筒らしきモノが在ると気づいた。

「何だろう。手紙、私宛てだ」

見ると、表に（真倉楓様）とある。

彼女は封を開け、中を確かめる。一枚の便箋には、こう書かれていた。

楓さん。最初に謝ります。今日一人で行く事。

僕にとって、今日はとても大事な日です。

やっと失くしたモノが手に入る日ですから。

でも、相手の出方でどうなるかわからない。

危険が伴うかもしれない。

そんな所に、楓さんを連れていく訳にはいきません。

なので、本当にすみません。

ここ数日楓さんと共に過ごせて、本当に楽しかった。

最初はどうなるかと思いましたが、貴女に会えて本当に良かった。

貴女に会えたおかげで、今日があると思います。

本当に感謝します。

これから僕は出掛けます。

後の事は先輩にお願いしときます。

それでは、楓さん。

くれぐれも、お身体大事になさって下さい。

それと、猫の千里さんにもよろしくと。

また、会えると嬉しいのですが。牧村陽輔

読み終えた彼女は、暫くの間沈黙したままだった。

「何これ。牧村さん、許さないからね。勝手に一人で行くなんて・・・。貴方は、独りじゃないからね」

彼女は脱兎の如く部屋を飛び出した。

どれくらいの時間が過ぎたのか、未だに彼女はハンドルを握っていた。

その時、スピーカから男の声で（殺す）と響く。

「えっ、えっ、何、どっちが言った・・・でも、そんなの絶対許さない。止めなくちゃ」

焦る彼女は、法定速度をオーバーしている事にも気付かず。疾走していた。

目的の場所まで後2キロというところで、聞き捨てならない言葉がスピーカから流れる（先輩、やられちゃいました。刺され・・・）

（ギャキーン）物凄い音と共に車が止まる。彼女は蒼白な面持ちで呟く。

「何で、どうして。牧村さん・・・。どうしよう」

彼女は身動き一つしない。

（ニャッ）助手席に居た黒猫がダッシュボードの携帯に飛び付いた。

「そうだ、警察。電話・・・。でも、どうしよう場所が・・・。えい、どうにでもなれ」

彼女は、警察に電話した。

辺りはすっかり暗さを増した、田舎道。

そこには小さな橋がある。その付近一帯には、パトカーが数台と救急車。

パトライトによってか、柳の木が異様な陰影で浮かび上がっていた。

そこから、東南方向の山陰にはサーチライトの光が交錯している。その中心に警察関係者。怒号飛び交う中に、携帯片手に彼女の姿も在った。

「多分、この奥だと・・・」

悲痛な面持ちで警察官の一人に伝える。

指揮官らしき人物の号令と共に関係者が一斉に動き出す。

彼女は、警察関係者と共に山の奥へと歩み始める。

うっそうと生い茂る雑木林を掻き分け進んで行くうち、くるぶしにひりひりとした痛みを感じた。何かで切ったのであろうが、その痛みを彼女は無視して奥へと突き進む。

辺りに、ほんのりと花の香が漂ったかに思えた時。周囲の様相が一変する。

（いたぞ）

その声に敏感に反応した彼女は、前へと歩みよる。そこは、木々に囲まれた小ホールに想えた

。

サーチライトで照らされた広場には、カタクリが群生している。その花は、光に照らし出され、紫色の花びらをいっそう輝かせていた。

中央には朽ち果てた幹があるのだが、その側に、土で身体半分程埋められた、男が横たわっている。

傍らに小さな遺骨を抱き抱えながら。

身動き一つしない男の側に駆け寄ると、彼女がこう告げた。

「牧村さん、しっかりして、牧村さん」

彼女の声が悲しい程辺りに鳴り響く。

終章（1）

霊安室で、小さな遺骨を前に手を合わせる男女が居た。

「田崎も捕まったな」

しんみりした調子で男が言った。

「ええ、そうですね。これで、茜ちゃんも、うかばれますよね」

彼女は涙ぐみながら応える。

「まだ、茜ちゃんの遺骨は帰していただけないのですか」

線香の香り漂うなか、彼女が質問する。

「嗚呼、手続きが終わるまでもう少しかかるらしい。でも、やっと陽輔とも会えたんだ。茜ちゃんだって幸福に思っているだろうさ」

「そうですね」

彼女はにっこりとほほ笑む。

「そろそろ、行くか。いい加減、奴をたたき起こしてやらんと」

「はい。そうしましょう」

二人は霊安室を後にする。

ラベンダーの香り漂うなか、眼を開けているにも拘わらず。世界は霧で覆われていた。

終りない世界をさ迷いながら、自分が何をしているのかさえ解らなかった。自分が何者なのか、何処へ行こうとしているのか考えた時。聞き覚えのある声が、感覚的に流れ込んでくるのが解り、聴覚に意識を集中した。（陽輔）（牧村さん）ははっきりと聞こえた。

そうだ、僕は存在して居る。会いたい人がそこに居る。もう、行かなきゃ・・・。

目を開けた時、そこが病院だと気付く。

「先生、目覚めました。こいつ目開けました」

眼球に光が交錯する。

「もう大丈夫ですよ」

医者が、僕の身体のあちこちを診ているのも解った。生きていた？

「牧村さん」

「あっ、まくらがえし」

「えっ」

「陽輔」

「こっちには、あずきあらい」

「はあ」

視野がはっきりした時、目の前に楓と笠井が居た。二人は顔を見合らし、大丈夫かと言わんばかりだ。

「陽輔、お前頭も打ったか」

笠井が、手を振る姿が見える。

「先輩」・・・

「牧村さん、しっかりして下さい」

「楓さん」・・・

二人は、ホッとした表情を見せる。

「陽輔、あんまり心配させるなよ」

「そうですよ、あんな無茶して」

「はあ」

まだ現実味がなく言葉が浮かばず、頭がクラクラする。

ゆっくりと思考を巡らす。あの時、刺されて・・・

「先輩、田崎は。田崎はどうなりました」

「あっ、嗚呼。捕まったよ。お前の無茶なおかげで」

苦笑いした先輩の表情が、凄く懐かしく感じた。

「そうですか。良かった」

正直、ホッとした。

「良くないです。牧村さん」

いつになく、眼をつりあげ怒る楓がいた。「えっ」

「えっ、じゃないです。牧村さん。あの日、わざと刺されたでしょ」

両手を腰にあて、真面目に怒る楓を見たのは初めてかも知れない。

「陽輔、素直に聞いといたほうがいいぞ」

助け船をだすかと思えば、楓を煽る勢いの笠井。

「へっ」

「へっ、じゃありません。死ぬところだったのですからね。こっちは、どれだけ心配したか。解っています、牧村さん」

ここまで、立て続けに言われると、もう一度気絶したい気分。

「す、すみません」

素直に謝らないと、収まりがつかないと思えた。

「もう、何か買って来ます」

何故か、楓は病室を出て行く。

「アレ、どうしたのですかね」

呆気にとられ、笠井に眼を向けると。それを見ていた笠井は、膝をバシバシ叩いて、笑いを堪えていた。

「こりゃいい、陽輔。女心は難しいって事さ」何が・・・。

「それより、楓が言った事は本当なのか」

いつもの、尊敬する笠井の顔がそこにある。

終章（2）

正直、笠井には嘘はつけない。

「はい、楓さんが言ったとおりです」

「どうして、そんな無茶な事をしたんだ。楓が言うように死にかけたんだぞ」

笠井は、真剣な眼差しを向ける。

「それは、茜の事件については、既に時効を向かえていましたし、証拠もありませんでした。岩手の事件にしてもそう。何も無い状態でしたから。なにより、妹の事は僕に責任がありました。どんな事をしてでも、奴を引きずり出したかった」

「やっぱりそうか。あの記事はお前が覚悟を決めて書いたものだったんだな」

笠井が、静かに語り始めた。

「ええ、確かに」

僕は、反論する事なく応えた。

「そうか、後から見た時驚いたよ。お前が苦手とする社会ネタだったからな。（田崎現町長の闇に迫る）だったか」

今聞くと恥ずかしいタイトルだが、あの時は真面目に書いたつもりだ。

「ええ少し恥ずかしいですけどね。アレさえ先輩に預けておけば、なんとかしてくれると本気で思ったものですから」

「馬鹿が、もう少し違うやり方もあったんじゃないのか。お前の命をかける程の男か田崎は」

笠井は、僕の頭をクシャとすると言葉を濁した。

「先輩、本来の僕の性格からして復讐するのが当たり前だと思っていました。けどそんな事をして妹は喜ばない。だから命懸けで妹の生きた証を探し出したかった」

「本当、馬鹿だなお前」

「はい、先輩の弟子ですから」

笠井は俯き、言葉をなくす。この人も、本気で心配したのだろう。

「先輩、本当にご心配おかけしました」

「嗚呼。お前は、俺がひろったんだ。今後勝手なまねは二度とするな。いいな」

俯いたまま、響きのある声で言う。

「はい」

この人には、二度と心配はかけないと堅く誓う。

「ところで、先輩。どうして、僕の居所が解ったんですか。あの時、僕の携帯のGPS機能を使って、探していたら・・・」

正直それが不思議でならない。笠井に、電話して伝えたかった事は、僕のGPS機能を使って、妹の遺骨を探してほしかった。例え僕が死んでも、かまわなかったからで、あんなにも早く、見つけてくれるとは思わなかった。

「それは・・・楓に聞け」

おかしな反応を示す。

「えっ、どうしてですか」

素直に疑問を述べたまでなのだが、笠井の反応が些か気になる。

「だから、お前を助けたのは楓だから、楓に聞いてくれ。俺の口からは言えん」
意味深な言い方をする笠井を不思議に思っていると、ちょうど楓が現れた。

手には、ポータブルTV。

僕に手渡し再生して観ろと言った。言われるまま再生すると、田崎の逮捕を報じるニュースが流れてきた。

顔は警察署員の服で隠されてはいたが、確かに田崎だ。

これでやっと終わったと実感出来た。これから、冷たい塀の中で自分の犯した罪の重さを悔いるがいいさ。時間はたっぷりある。

なあ、田崎。聞いた話じゃ、あの世も、地獄も無いとさ、だから悔い改めるしかないようだ。自分自身で。

「ありがとう。楓さん」

ニュースを見終わると、楓にテレビを返しがてら礼を言う。

そして、先程の疑問をぶつけてみる。

「嗚呼アレは、お守りのお陰。みたいな」

みたいな？楓の表情はいつもの穏やかさに戻ってはいたが、多少引き攣って見える。

側の丸椅子に座った笠井は、興味津々の面持ちだ。笠井は知っているのか。

「お守りって、コレの事」

僕は、病院に備え付けの華奢な収納テーブルに目を向ける。その一番上に、何故かあの蛇のブレスレットが置いてある。

「そうそう、それ」

軽い返事が返ってくる。しかし、いくらなんでもコレで見つけられたとは思えない。怪しんだ目を楓に向ける。しばらくすると。

「はいはい、解りました。白状します」

根負けしたのか、諦めが早いのか、応えてくれるようだ。

「そのブレスレットは・・・盗聴器、プラス発信機かな」

なんですと。盗聴器、発信機。コレが？「嘘でしょ」

「今更、嘘ついてどうするんです。ちなみに、5キロ圏内ですけど」

（開いた口がふさがらない）ってのは、こんな時使うのだろうか。

「前に言ってしまった事あったでしょ、マリアって」

「えっ、また聖母マリア」

「何言っているんです。マ・ニ・ア。盗聴マニアなんです。私」

ええ、聖母じゃないだ。盗聴マニアね。犯罪マニアって事ですか。でも、凄いかも。

丸椅子の笠井は、爆笑さながらの顔つき。やっぱり知っていた。

「では、今までのも」

「はい、全部私がやってのけました」

そう、それで納得。占い時の名前、伊藤に頼んだ、早すぎる写真。ん、もしかして。

「あの、岩手の電話も」

「はい、私。だって牧村さん、あの時早く調べたそうにしていたから、ちょっと背中を押してあげようかと。それと、牧村さんの携帯は盗聴される事もなかったの、その辺のボイスチェンジャーで、ちゃちゃっと」

（ちゃちゃっ）とって、楓さん。でも、あれがきっかけで、今回の事件を終わらせる事が出来たのだから感謝すべきか。

しかしながら、最後にニヤリッと笑う彼女が、意外にも頼もしく見えてしまった。

先輩、何故。

その後、僕は順調に快復すると、茜の遺骨を先祖が眠るお墓に埋葬し、故郷を後にする事となる。

仙台から東京へ発つ日、楓が見送りに来てくれた。彼女は、最後に（またね）と言ってくれた。また会う日がくるのだろうかと思いつつ、仙台を後にした。

『消失』おしまい。